

惣田遺跡

日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

1994年

日田市教育委員会

序 文

ここ数年来日田市内では、九州横断自動車道建設や国道210号線バイパス建設をはじめ、こうした道路に接続するアクセス道などの整備が図られてきました。

これらの道路建設に伴う、文化財保護を目的とした事前の発掘調査も増加しており、貴重な文化財が発見される機会も多くなっています。

なかでも小迫辻原遺跡は、県指定史跡としてその一部が保存されるなど、文化財行政にたずさわる者として喜ばしいことでもあります。

このように、開発と文化財保護との調整は日田市行政の中にあつた急務な問題となっております。

今回報告します惣田遺跡も、市道平原捨ノ平線道路建設に伴い失われる遺跡の一つとなりましたが、本記録報告書が私たちの祖先の残してくれた文化財の大切な資料となり、活用いただければ幸いと存じます。

最後に調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、多くの皆様にご協力をいただきました。そのご労苦にたいし、心から感謝申し上げます。

平成6年3月

日田市教育委員会

教育長 加藤 正 俊

例 言

- 1、本書は平成3・4年度に日田市教育委員会が実施した市道平原捨ノ平線道路建設に伴う発掘調査報告書である。
- 2、調査にあたっては地元土地所有者や市土木課のご協力を得た。
- 3、発掘調査は平成3年度を行時、平成4年度を土居・森山がそれぞれ担当した。
- 4、とくに発掘調査では村上久和、田中裕介、友岡信彦（大分県文化課）氏らのご指導をいただいた。
- 5、調査現場での作図は各担当者が行った。また写真撮影は土居・行時が行ったほか、遺跡の空中写真は(株)スカイサーベィに委託した。
- 6、本書掲載の実測図および製図は土居・行時が行い、松下桂子（広島大学生）氏のご協力を得た。
- 7、本書の執筆は本文目次に記し、編集は土居・行時が行った。
- 8、なお、本書には付編として遺跡周辺の文化財をあわせて掲載している。
- 9、表紙の題字は日田市立博物館長原田良伸の揮毫による。

本文目次

I. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経過	(行時) 1
(2) 発掘調査の経過	(行時・土居) 2
(3) 調査団の構成	(行時) 2
II. 遺跡の立地と環境	(行時・松下) 3
III. 調査の内容	7
(1) I 区の調査	(行時) 7
(2) II 区の調査	(土居) 10
(3) III 区の調査	(土居) 11
(4) IV 区の調査	(土居) 17
(5) V 区の調査	(土居) 22
(6) 惣田遺跡の出土遺物	(土居) 28
IV. まとめ	(土居) 31
付編 1. 惣田塚古墳	(土居) 41
付編 2. 高瀬地区の文化財	(行時) 46
1. 姫塚古墳	(土居) 47
2. 永平寺跡板碑	(行時) 51
3. 石人	(行時) 57
4. 石幢	(行時) 60

挿 図 目 次

付 図 惣田遺跡発掘調査区全体図	
第 1 図 発掘調査区位置図(1/5,000)	1
第 2 図 日田盆地の主要遺跡分布図(1/25,000)	5~6
第 3 図 I 区調査地点区割図(1/750)	8
第 4 図 I 区遺構配置図(1/200)	9
第 5 図 1・2号土坑実測図(1/20)	9
第 6 図 II 区遺構配置図(1/300)	10
第 7 図 III 区遺構配置図(1/300)	11
第 8 図 1号竪穴住居跡実測図(1/40)	12
第 9 図 2号竪穴住居跡、1号土坑実測図(1/40)	13
第10図 1・2号竪穴住居跡、1号土坑出土土器実測図(1/3)	14
第11図 1号溝実測図(1/120)	15
第12図 1号溝出土土器実測図(1/3)	16
第13図 1号建物実測図(1/40)	16
第14図 IV 区遺構配置図(1/300)	17
第15図 2号溝実測図(1/160)	17
第16図 4号土坑実測図(1/40)	18
第17図 5号土坑実測図(1/40)	18
第18図 2号建物実測図(1/40)	19
第19図 3号建物実測図(1/40)	20
第20図 4号建物実測図(1/40)	21
第21図 V 区遺構配置図(1/300)	22
第22図 3号溝実測図(1/120)	23
第23図 3号溝出土土器実測図(1/3)	24
第24図 6号土坑実測図(1/40)	24
第25図 7号土坑実測図(1/40)	25
第26図 5号建物実測図(1/40)	26
第27図 6号建物実測図(1/40)	27
第28図 遺跡出土の弥生土器実測図(1/3)	28
第29図 遺跡出土の須恵器・土師器実測図(1/3)	29
第30図 遺跡出土の中世土師器実測図(1/3)	29
第31図 遺跡出土の石器実測図 1(1/1)	30
第32図 遺跡出土の石器実測図 2(1/3)	30
第33図 惣田塚古墳位置図(1/5,000)	41
第34図 惣田塚古墳墳丘測量図(1/300)	42
第35図 惣田塚古墳石室実測図(1/50)	43
第36図 姫塚古墳位置図(1/5,000)	47
第37図 姫塚古墳実測図(1/400)	49
第38図 姫塚古墳出土蛇行剣実測図	49
第39図 姫塚古墳石室実測図(1/30)	49
第40図 永平寺跡板碑位置図(1/5,000)	51
第41図 板碑 1 実測図(1/6)	53
第42図 板碑 2 実測図(1/12)	54

第43図	石人位置図 (1/5,000)	5 7
第44図	石幢位置図 (1/5,000)	6 0
第45図	石幢実測図 (1/8)	6 2

図 版 目 次

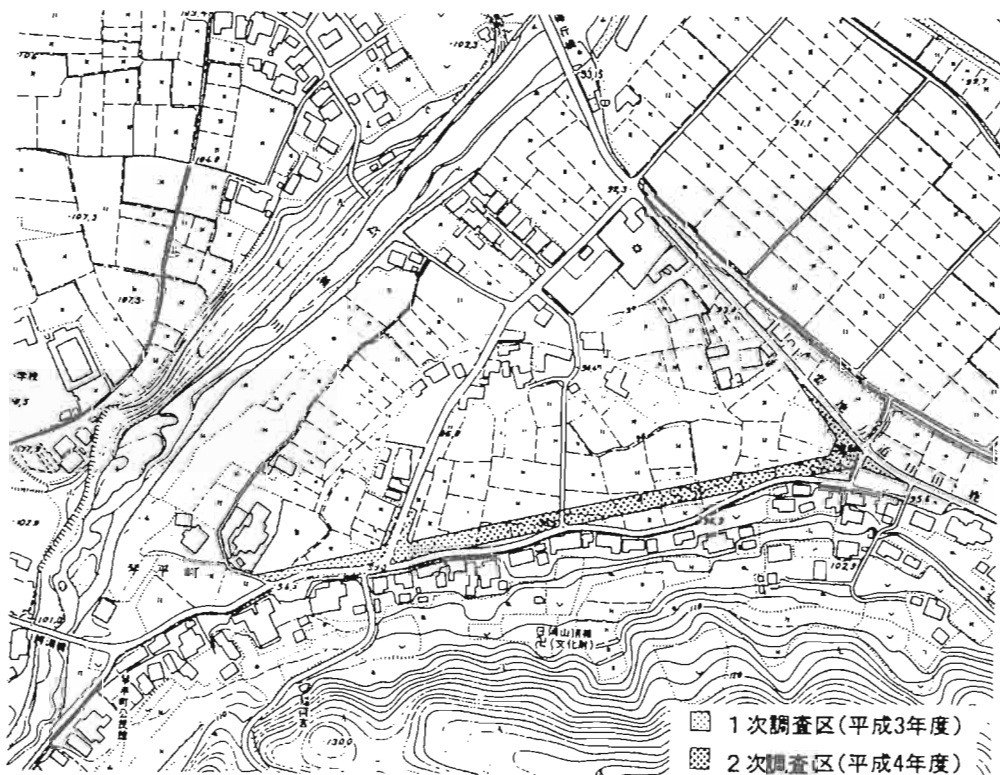
巻頭図版	(上) 惣田遺跡空中写真(南西方向から) (カラー) (下) 惣田遺跡空中写真(真上から)
図版 1	(上) 惣田遺跡調査区空中写真(北東方向から) (下) 惣田遺跡調査区空中写真(真上から)
図版 2	(上) 惣田遺跡Ⅲ区空中写真(真上から) (下) 惣田遺跡Ⅳ区空中写真(真上から)
図版 3	(上) 惣田遺跡Ⅴ区空中写真(真上から) (下) 惣田遺跡Ⅴ区空中写真(真上から)
図版 4	(上) 惣田遺跡Ⅲ区 1、2号竪穴住居跡完掘写真(西より) (中) 惣田遺跡Ⅲ区 1号竪穴住居跡カマド完掘写真 (下) 惣田遺跡Ⅲ区全景写真(東より)
図版 5	(上) 惣田遺跡Ⅳ区全景写真(西より) (中) 惣田遺跡Ⅳ区 2号溝掘下作業風景 (下) 惣田遺跡Ⅳ区 2号溝完掘写真
図版 6	(上) 惣田遺跡Ⅴ区 3号溝掘下作業風景(東より) (中) 惣田遺跡Ⅴ区 3号溝完掘写真(東より) (下) 惣田遺跡Ⅴ区 3号溝完掘写真(北より)
図版 7	I区出土遺物
図版 8	V区及び一括遺物
図版 9	(上) 惣田塚古墳遠景(南方向より) (中) 惣田塚古墳近景(南方向より) (下) 惣田塚古墳近景(南東方向より)
図版 10	(上) 惣田塚古墳近景(南東方向より) (中) 惣田塚古墳正面写真 (下) 惣田塚古墳石室写真(前室入口より)
図版 11	(上) 姫塚古墳近景 (下) 姫塚古墳近景
図版 12	(上) 永平寺跡板碑遠景 (下) 永平寺跡板碑近景
図版 13	(上左) 板碑 1・2 正面写真 (上右) 板碑 1・2 側面写真 (下左) 板碑 1 正面写真 (下右) 板碑 2 正面写真
図版 14	(上) 石人 2 体正面写真 (中) 扁平石人上部正面写真 (下) 扁平石人上部裏面写真
図版 15	(上) 石幢近景(南方向より) (下) 石幢正面

Ⅰ 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

平成2年12月4日、市土木課より日田市教育委員会宛に市道平原捨ノ平線建設工事予定地の日田市大字高瀬974-1ほか4,920㎡について埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについての照会文が提出された。これを受けて日田市教育委員会では遺跡が市史跡惣田塚古墳に近く、また周知遺跡にあたるため、平成2年12月7日から17日までの約10日間にわたり国庫補助事業により工事予定地内の試掘調査を実施することとした。

調査は道路建設予定地内ですでに用地買収が終了している水田に合計5ヶ所のトレンチを設定して遺構の確認を行ったところ、惣田塚古墳に最も近い地点(5トレンチ)や県道と市道の分岐点にあたる付近(1トレンチ)で柱穴や古墳時代および中世とみられる須恵器や土師質土器などの遺構・遺物の存在が確認された。このため再度土木課と今後の工事計画と発掘調査についての協議を行った結果、国道210号線バイパスと関連してその取付道工事を急ぐことから工事着工は変更なく行い、また工期は2ヶ年にまたがって行うことから、先に工事を予定している地点(1次調査分)1,682㎡については平成3年度に実施し、残り(2次調査分)3,238㎡を平成4年度に分けて実施することとなった。



第1図 発掘調査区位置図(1/5,000)

(2) 発掘調査の経過

発掘調査の経過について、以下にまとめる

1次調査（平成3年8月30日～9月10日）

平成3年度の調査は、全体の工事予定区域の西側約3分の1にあたり、実質調査面積は約1,200㎡である。

この区間は南からの急斜面が迫っており、現在の市道に近い部分はそれを掘削して造られ、そのために遺構はほとんど確認されなかった。また調査中は市道の側に水路が通っており、調査区内に水が流れ込み調査時の半分は水の汲み出し作業に追われるなど調査は困難を極めたが、遺構の密度が少なかったため調査は短期間で終了した。

2次調査（平成5年12月1日～平成6年2月19日）

2年目の調査は12月1日より機械を入れ、I区より順次表土剥ぎを始めた。表土剥ぎは当初道路路線内全域を対象としていたが、現在の水田の段差が1m以上もあり、また住宅跡地では攪乱がひどかったことから部分的な範囲とした。平成6年2月19日に器材を撤収し全調査を終了した。

(3) 調査団の構成

調査主体	日田市教育委員会		
調査総括	日田市教育長	楢原 芳彦（～平成4年11月）	加藤 正俊（平成4年11月～）
調査事務	日田市立博物館館長	重石 巧（平成2年4月～平成3年10月）	
	同（兼教育次長）	矢野 友章（平成3年11月～平成4年3月）	
	同	原田 良伸（平成4年4月～平成6年3月）	
	同 次 長	阿部 正義（平成4年4月～平成6年3月）	
	同 主 任	小埜サダ子（平成2年4月～平成4年3月）	
	同 臨 時	後藤 裕子（平成4年4月～平成5年3月）	
	同 同	羽野 恭子（平成5年4月～平成6年3月）	
調査員	同 学芸員	土居 和幸（平成4年度調査担当）	
	同 同	行時 志郎（平成3年度調査担当）	
	同 囑 託	森山敬一郎（平成4年度調査担当）	
調査作業員	江田美代子、梅木鈴子、益永勇、原田友枝、原田国介、毛利四郎三、勿留三、宇野アサエ、宇野ヒトエ、横尾テル子、梶原巳年、木下カネ、宇野ケサカ、宇野カスミ、加藤キヨ子		
整理作業員	財津朱美、田中静香、石松京子、松本佳世子		

II 遺跡の立地と環境

惣田遺跡は、大分県日田市大字高瀬字惣田・平原に所在する。

日田市は、大分県の西部に位置し、福岡県と隣接している。市域面積のうち林野面積が77.8%を占めるといふ山岳林野地帯で、地勢的には標高400～1200mの筑紫溶岩台地の内側に標高200～400mの耶馬溪溶岩台地、その内側に標高150mの阿蘇溶岩の段丘が続き、さらにその内側には三隈川をはじめとする河川の影響で発達した標高80～100mの土砂堆積層（低地）があり、現在市街地が広がる盆地部を形成している。日田盆地には大小75の河川があり、それらは盆地内で合流して筑後川となり筑紫平野を貫流する。それぞれの川を遡ると大分や熊本阿蘇、豊前各地方に繋がっており、三隈川を下れば筑後地方に連なっているため、盆地という閉鎖された環境でありながら、北部九州の各地と関わりを持つことが可能であったようである。

日田盆地で確認される最も古い遺跡は旧石器時代後期のもので、標高100～150mの比較的高地から「翼状剥片」を素材とした「国府型ナイフ形石器」や三稜尖頭器、細石器などが採集されている。縄文時代になると盆地南部に当該時期の遺跡が数多く見られる。とくに長者原遺跡からは早期の押型文土器や撚糸文土器が出土したのをはじめ、後期の磨消縄文を施した小池原式土器や西平式土器、晩期の黒色磨研土器などが確認されている。さらにこの台地を西へ下った所に位置する川下遺跡からも後期の鐘ヶ崎式土器や北久根山式土器などが発見されている。また、三隈川をさか上った大山川と玖珠川が合流する地点の左岸河岸段丘上にある手崎遺跡では早・前期の早水台式土器や轟式土器などが包含層より多数出土しさらに西平式土器を主体とした後期の竪穴住居跡も日田市内でははじめて確認されている。

弥生時代には縄文時代に比較して遺跡数は激増し、台地上一円に確認されるようになる。とくに縄文時代とは逆に盆地北部一帯が主体的となり、吹上遺跡をはじめ、朝日宮ノ原遺跡・後迫遺跡・佐寺原遺跡・葛原遺跡などでは前・中期の大規模な集落遺構が多数確認されている。そして弥生時代後期になると有田平島遺跡や夕田遺跡そして今回調査された惣田遺跡のように沖積地上における遺跡の数が増加していく様子が垣間見られる。このような状況にあつて小迫辻原台地上に関しては逆に弥生時代終末期から環濠集落が営まれ、古墳時代前期に至っては環濠居館が造られるなど日田盆地の他の遺跡とは少し異なる様相を呈している。

古墳時代の集落遺跡は前・中期では小迫辻原遺跡をはじめ徳瀬遺跡など数遺跡をあげるに過ぎない。しかし墓地については、草場第二遺跡や朝日宮ノ原遺跡D地点などの4世紀を中心とする集団墓地群をはじめ、5世紀初頭から前半頃にかけての築造とされる薬師堂山古墳や小迫古墳、5世紀後半の城山古墳（前方後円墳）などのような在地首長の存在を示す古墳が日田盆地を取り巻く台地上や丘陵上に点在していることが看守される。後期にはこうした古墳は群集墳として日田盆地全体にさらに拡散していくようであり、古墳被葬者のヒエラルキーはより集団単位における首長としての実態を示すようになってくる。惣田遺跡周辺では6世紀後半の惣田塚古墳が唯一であるが、地元の話によれば周囲には他に6基の塚が存在していたようであり、この古墳が群集墳として存在したことが推測される。

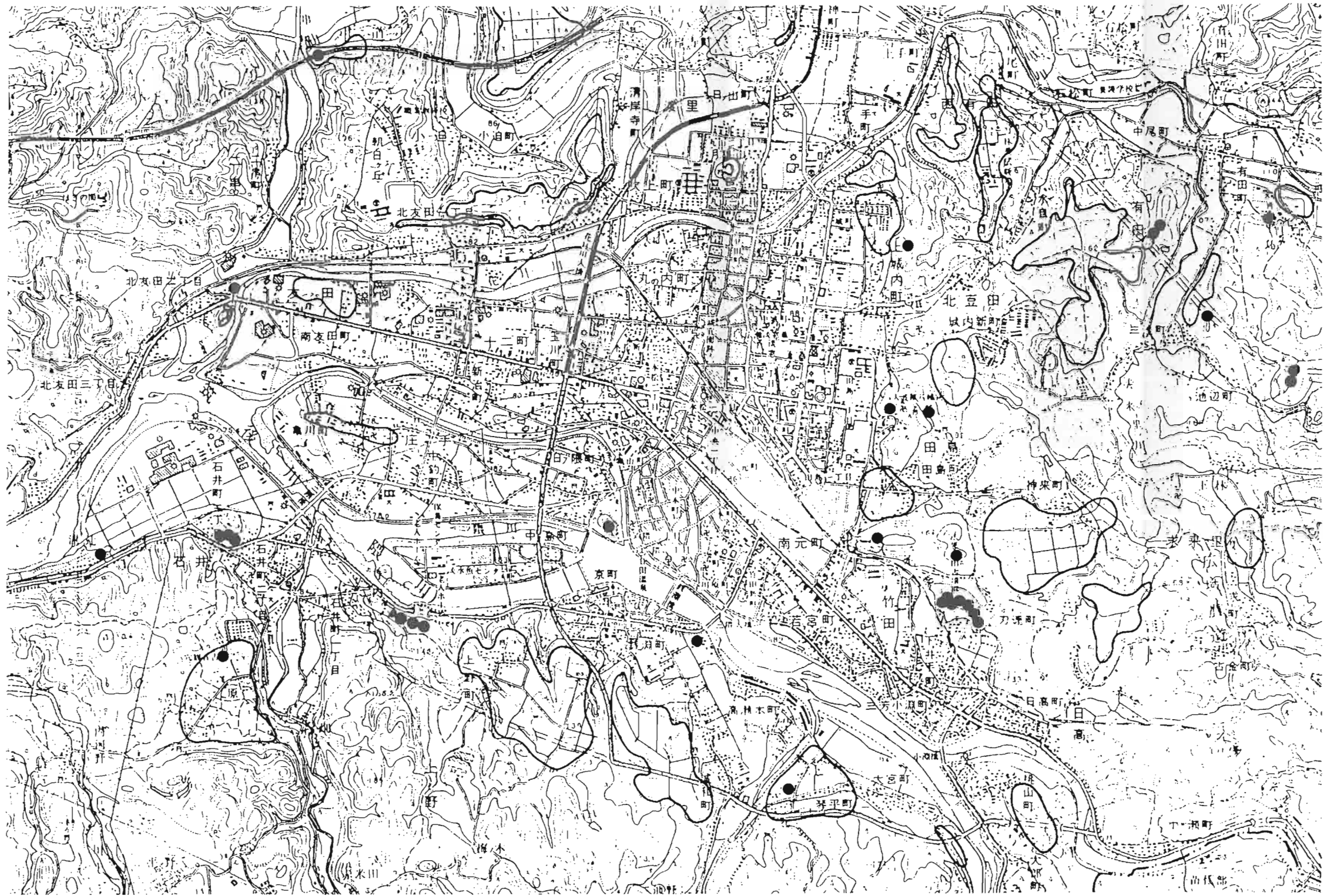
奈良時代の遺跡はこれまでの発掘調査で小迫辻原遺跡・長者原田迎遺跡・上野第1遺跡・手崎遺跡などで確認されているが、とくに盆地南部の遺跡が目立っている。『豊後国風土記』によれば、三隈川南岸は石井郷とされ、大宰府から大分へ抜ける官道があり、それに関わつて郷内

に駅が一か所設置されていたことが記されている。駅とこれらの遺跡の関係については不明であるが、上野第1遺跡より出土した「豊馬豊馬」と刻まれた石製品はこのことを考える上で非常に興味深い発見である。

中世においては、惣田遺跡のすぐ東部に廃寺となった普門寺があり、応永16年(1409)に彫られた開山の笑巖和尚坐像が安置されていたことから、近世以前より惣田遺跡周辺における集落は継続して営まれたものと考えられる。

参考文献

- (註1) 穴井通照 「第1編 第一章 旧石器・縄文時代」『日田市史』 日田市 1990
- (註2) 「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ、Ⅱ』 日田市教育委員会 1986
- (註3) 註1に同じ
- (註4) 「手崎遺跡・大部遺跡」『一般国道実210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 大分県教育委員会 1992
- (註5) 土居和幸 「第1編 第二章 弥生時代」『日田市史』 日田市 1990
- (註6) 「平島遺跡」『日田市埋蔵文化財報告書 第3集』 日田市教育委員会 1990
- (註7) 「夕田遺跡」『九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報－日田～玖珠間－3』 大分県教育委員会 1993
- (註8) 『居館の里－小迫辻原遺跡－』 日田市教育委員会 1993
- (註9) 「草場第二遺跡」『九州横断自動車道関係発掘調査報告書 第1集』 大分県教育委員会 1989
- (註10) 「朝日宮ノ原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』 日田市教育委員会 1989
- (註11) 「城山古墳」『大分考古 創刊号』 大分県考古学会 1988
- (註12) 「長者原田迎遺跡」『日田市埋蔵文化財調査報告書 第5集』 日田市教育委員会 1992
- (註13) 「上野第1遺跡」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 大分県教育委員会 1991



1. 小迫墳墓群
2. 小迫辻原遺跡
3. 吹上遺跡
4. 北友田横穴墓群
5. 吹上横穴墓群
6. 三郎丸古墳
7. 星隈横穴墓群
8. 荻鶴遺跡
9. 月隈横穴墓群
10. 羽野横穴墓群
11. 慈眼山戸頃遺跡
12. 慈眼山瀬戸口頃遺跡
13. 丸山遺跡
14. 夕田横穴墓群
15. 佐時原遺跡
16. 中尾原遺跡
17. 大迫遺跡・中尾1・2号墳
18. 平島遺跡・平島古墳
19. 尾漕遺跡・尾漕古墳
20. 有田塚ヶ原古墳群
21. 赤迫遺跡
22. 丸尾神社古墳
23. 薬師堂山古墳
24. 会所宮古墳
25. 鳥羽塚古墳
26. 北向遺跡
27. 元宮遺跡
28. 東時原遺跡
29. 法恩時山遺跡
30. 求来里平島遺跡
31. 日隈古墳
32. 徳瀬遺跡
33. 津辻古墳
34. ガランドヤ古墳群
35. 穴観音古墳
36. 長者原遺跡
37. 護願時古墳
38. 上野遺跡
39. 陣ヶ原遺跡
40. 姫塚古墳
41. 惣田塚古墳
42. 惣田遺跡
43. 手崎遺跡
44. 牧原遺跡
45. 東寺横穴墓群

第2図 日田盆地の主要遺跡分布図(1/25,000)

III 調査の内容

(1) I 区の調査 (第3図)

I 区は発掘調査の経過で触れたように、調査予定地が水路や道路によって数ヶ所に分断された状況にあることから、表土剥ぎ作業を行うにあたって範囲全体を一度に検出することはできなかった。そこで、以下説明を加えるにあたっては部分的に表土剥ぎ作業を行った隣接する調査区を一つとして便宜上3地点に分け、それぞれにA、B、Cのアルファベットで示し、地点ごとの説明を行うことにする。

A地点 (第3図)

A地点は山地より下る斜面と沖積地の境界付近にあたり、現道の北側に隣接している。現在水田となっているが後世に削平を受けたためか、表土除去後の確認面にはすべてに礫層が広がっており、遺構は全く存在しなかった。

B地点 (第3, 4図)

B地点は惣田塚古墳から東部に30mほどの距離にあたり、古墳と同時期の遺構の存在が期待された。B地点南部ではA地点と同様の礫層が広がっており、遺構・遺物の出土はなかった。また北部は地山が砂質性の強い黄褐色土で、これを掘り込んで柱穴および土坑が2基確認された。しかしいずれも出土遺物がほとんどなく遺構の時期を判断することはできなかった。また、表土層より弥生時代中期の土器および中世の土師質土器が出土したものの惣田塚古墳と関わりのあるような古墳時代の遺物は確認できなかった。

C地点 (第3図)

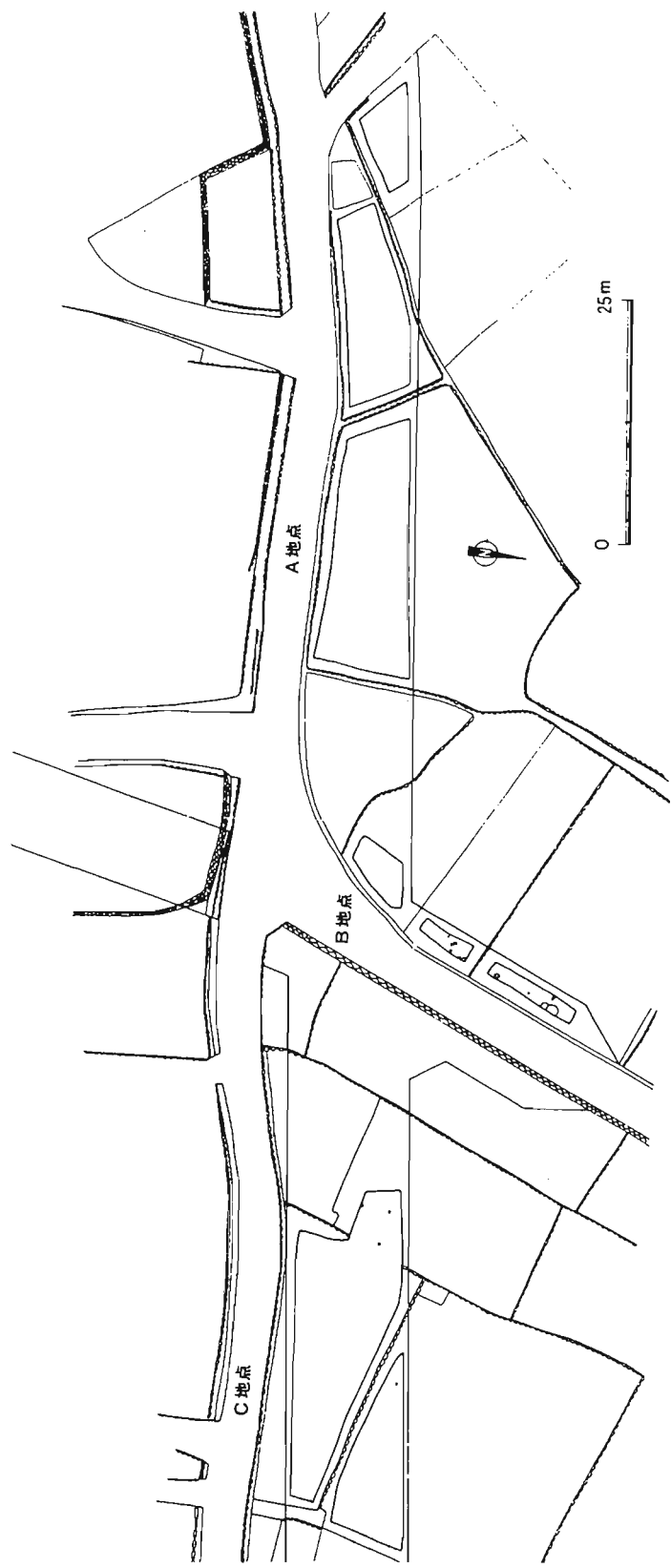
C地点は試掘調査の時点で中世の土師質土器が出土しており、遺物の存在が確認されていた。地山はB地点と同様、南部は礫層、北部は砂質性の強い黄褐色土である。遺物は含土中より土師質土器が数点出土が、遺構は北西部で柱穴が4個確認されたのみであった。

1号土坑 (第5図)

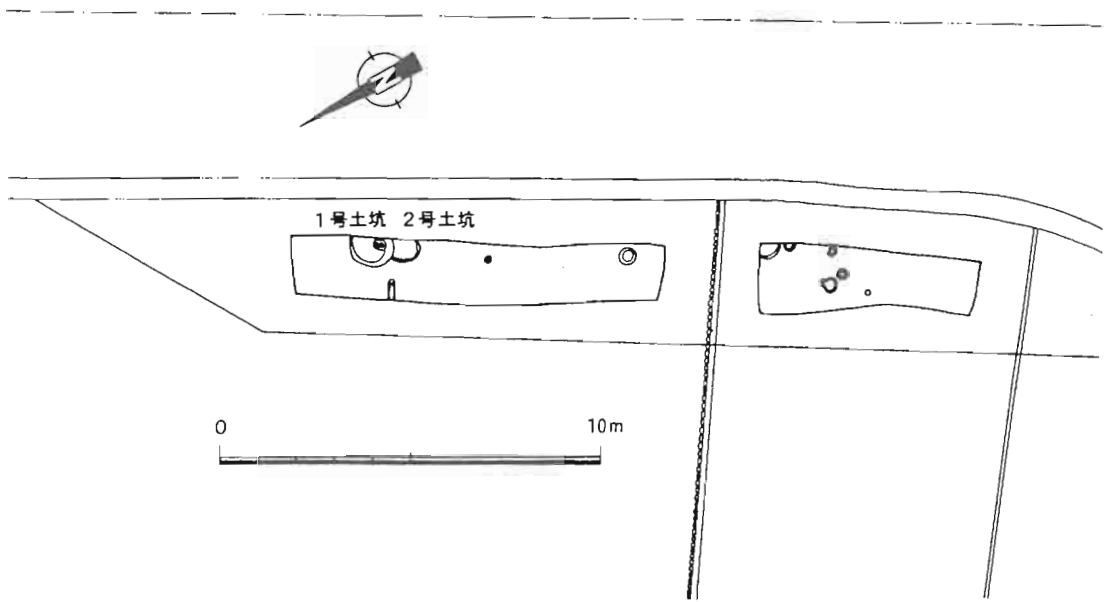
遺構は、2号土坑を切っており、推定で直径1.1m、深さ0.15mを測る。平面プランは楕円形を呈しているとおもわれる。底面は平坦で断面形をみると逆台形となっている。この遺構からの出土遺物はなかった。

2号土坑 (第5図)

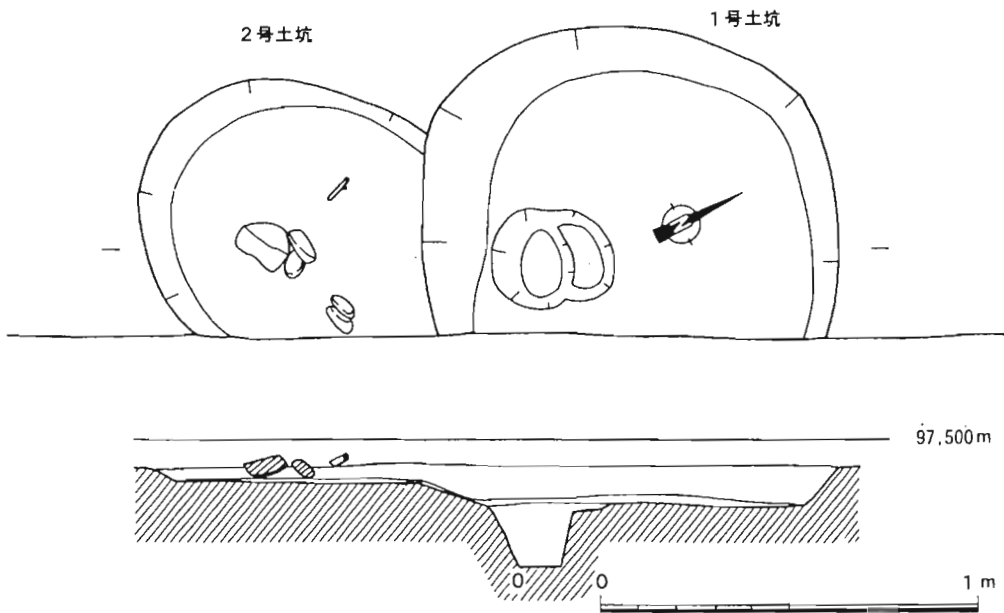
遺構は推定で直径0.8m、深さは0.1mを測る。平面プランは1号土坑と同様、楕円形を呈しているとおもわれる。底面は平坦で、断面形も1号土坑と同様逆台形を呈している。この遺構からは、1点突帯のついた弥生時代中期の土器片が出土している。



第3図 I区調査地点区割図(1/750)



第4图 I区遺構配置図(1/200)



第5图 1・2号土坑実測図(1/20)

(2) II区の調査 (第6図)

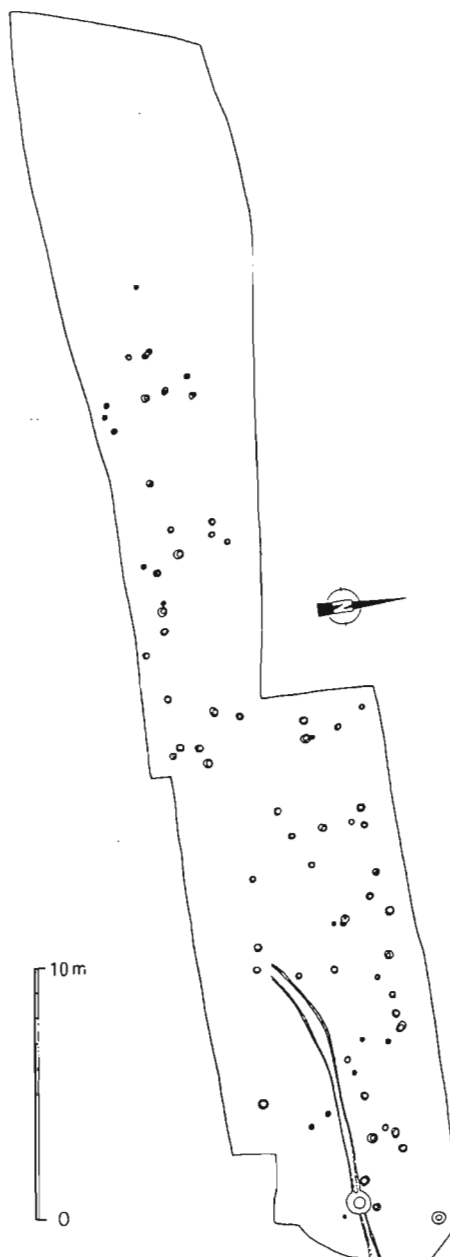
この調査区では現水田下に黒色の土器包含層があり、その下位には地山である礫混じりの茶色粘質土が堆積している。後方で遺構が検出された。

黒色の土器包含層は10~30cmの堆積がみられ、弥生土器(甕や壺などの口縁部や底部)や土師器小皿、火鉢、染め付けなどのローリングをうけた土器片が混在して出土し、加えて地山礫などが多く含まれている。この包含層は東側に比べ西側のほうがより厚く堆積していた。

地山で検出した遺構には柱穴74、溝1条、土坑1基がある。

柱穴は大きさがまちまちで、深さも不揃いである。検出できた柱穴は建物や柵列を構成できそうな様子はみられない。これらの柱穴内からの遺物の出土はなく、時期の決定はできない。

溝はほぼ東西走る約12mほどを検出した。深さは約30cm、幅は約30~70cmを測るが、削平をうけているためか残りは良くない。このため、溝は西側でなくなっている。この溝の一部には直径約90cmの土坑1基がみられる。その位置関係からみて溝に伴うものと考えてよさそうである。深さは約1mを測る。溝と土坑内からは遺物の出土がなく時期は不明であるが、埋土の状況から少なくとも中世中期以降の所産と考えられる。



第6図 II区遺構配置図(1/300)

(3) Ⅲ区の調査 (第7図)

この調査区では、現水田面除去後に遺構面が確認された。地山は茶色粘質土で所々に拳大から頭大を越える大きな礫が含まれている。特に調査区の西側では礫の量が顕著で、そのためか遺構の存在は稀薄である。この調査区では、竪穴住居4軒、溝1条、建物(?)1棟、土坑1基、柱穴多数を検出している。

1号竪穴住居 (第7・8図)

全体のプランは南北3.2m以上、東西4.5mを測る。検出面から床面までは15cm前後と残りはよくない。支柱穴は4本と推定され、3本(P1~P3)を確認している。竪穴住居内の南西隅付近では、焼土や炭の広がりが見られた。

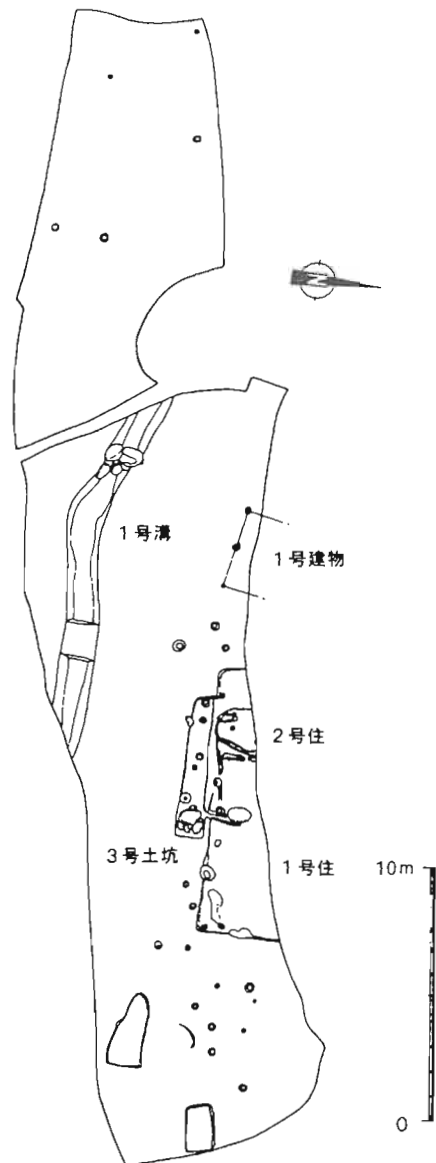
また、東側壁面には1号カマドが付設されており、袖の一部を確認できたが残りはよくない。燃烧部と思われる位置に赤く焼け固まった焼土塊がみられ、その両脇には袖石を立てたと思われる小ピットが1ヶ所ずつ残っていた。1号カマドの南側には2号カマドがあり、50cm程度の浅い掘り込みに、焼土塊と小ピット1個が残っていた。その南には、2号カマドに伴うと考えられる焼土や炭などを含む不整形な土坑がある。

遺物 (第10図)

1・2とも坏である。1は口縁部が垂直に立ち上がり、先端部が内湾する。底部はやや不安定である。口径12cm、器高3.5cmを測る。2は口縁部が外反し、先端部は内湾する。口縁部と底部に稜をもち、底部は安定する。口径12.3cm、器高2.4cmを測る。

7~9は甕である。口縁部が大きく外反し、内面に明瞭な稜をもち、口径は23.5cm、27cm、26.7cmをそれぞれ測る。

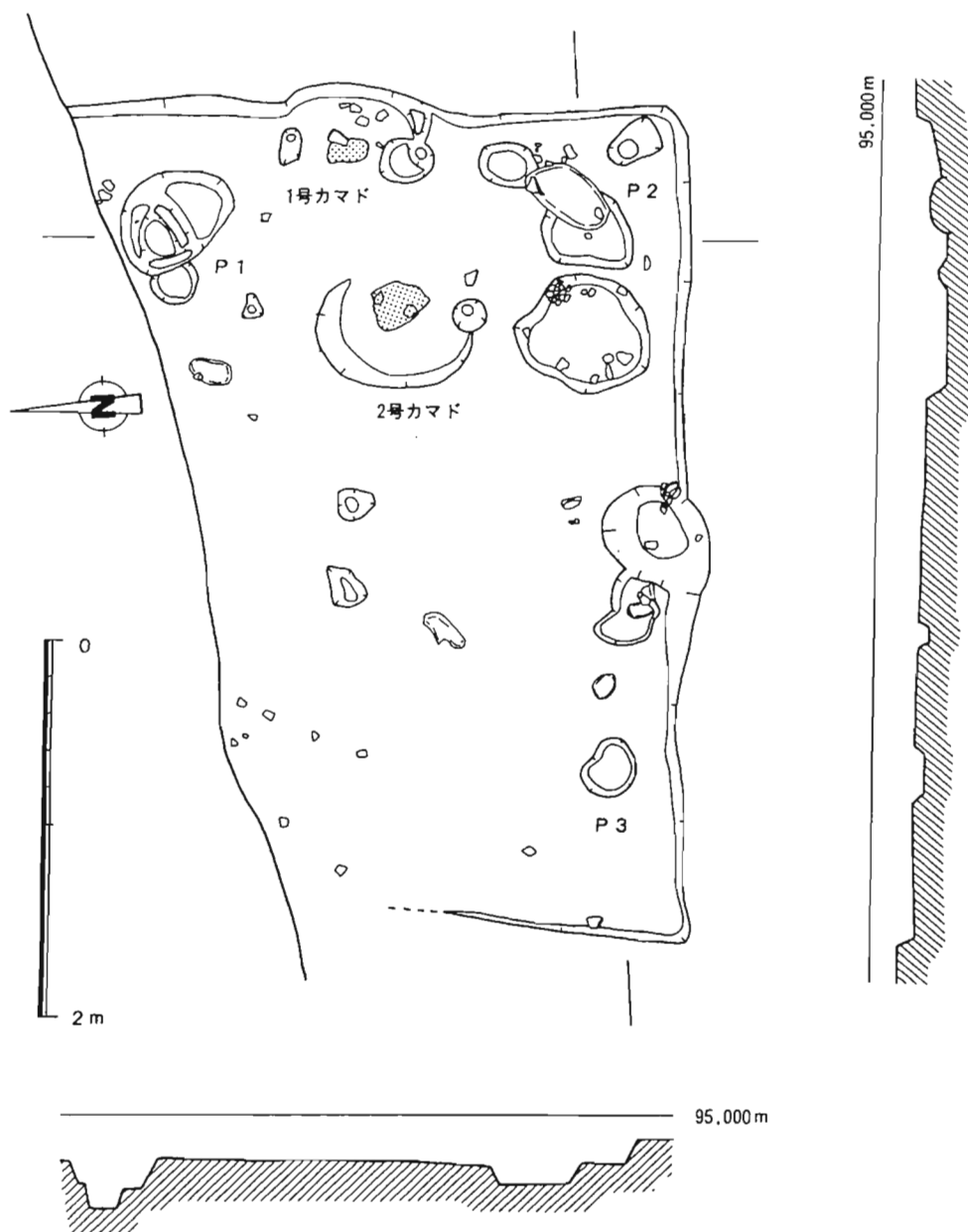
これら土師器のほかに、先端部が鳥嘴状を呈する須恵器の坏蓋の口縁部が出土している。



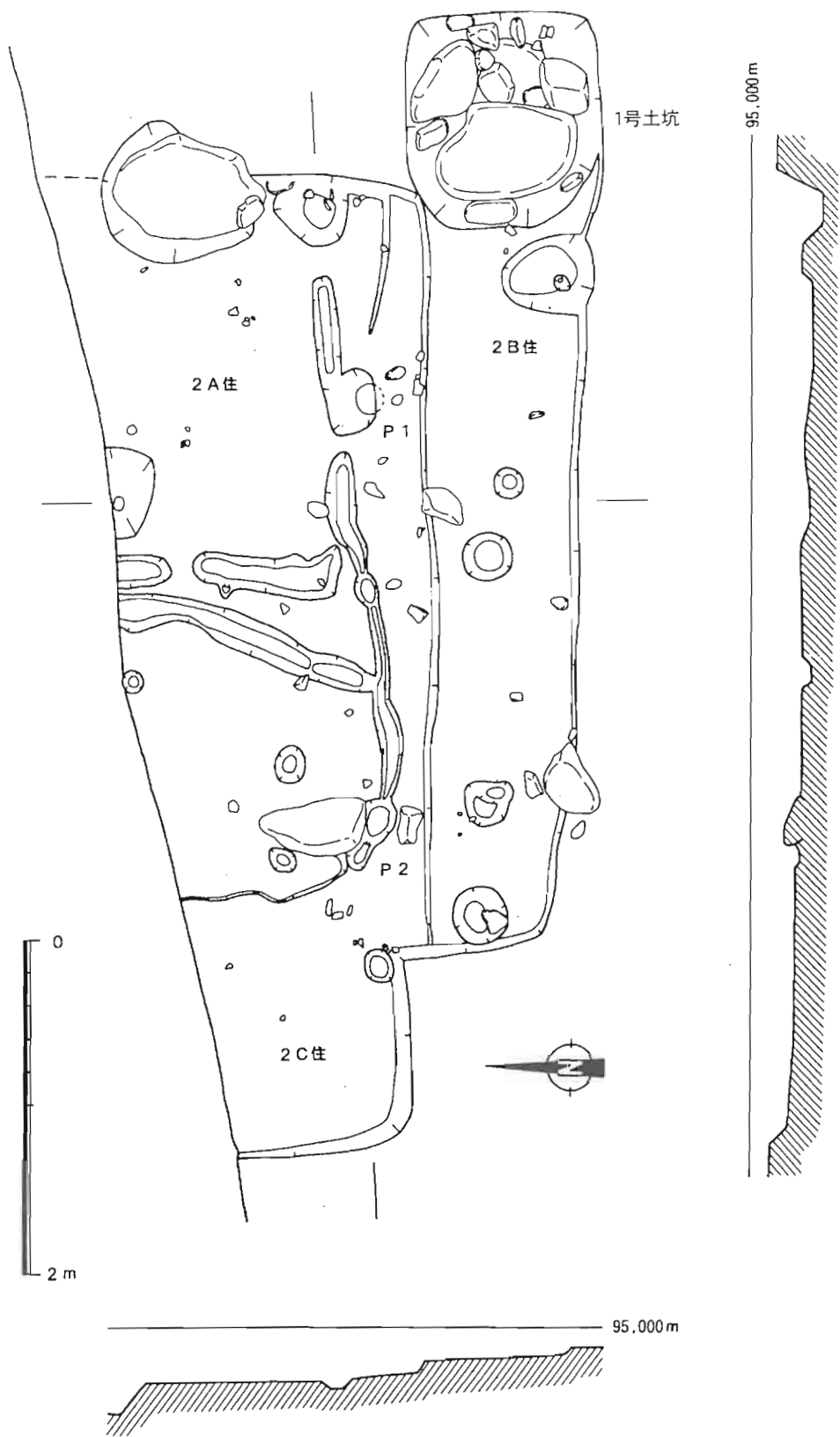
第7図 Ⅲ区遺構配置図(1/300)

2号竪穴住居 (第7・9図)

1号竪穴住居の西側で検出した竪穴住居で、第9図に示すとおり3基が重複して検出された。このうち2基(2A住・2B住)の竪穴住居は切り合い関係により新旧が確認され、さらにその2基の竪穴住居と2C住も切り合い関係にある。これら3基の竪穴住居は削平をうけていて残りはよくない。



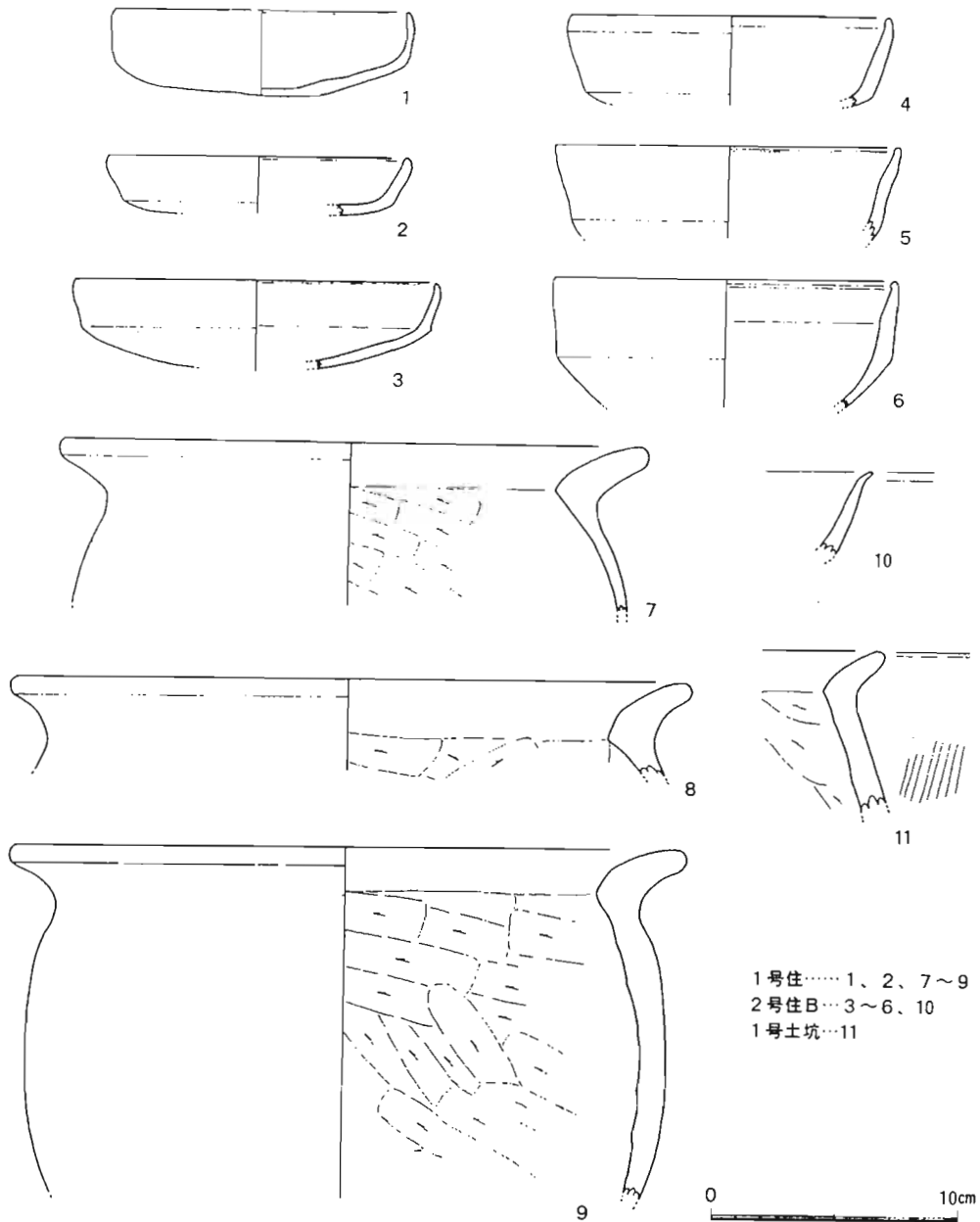
第8図 1号竪穴住居跡実測図(1/40)



第9图 2号竖穴住居跡・1号土坑実測図(1/40)

2号A竪穴住居（第9・10図）

この竪穴住居は2号B竪穴住居の内部を切るように建てられており、壁周溝の一部が残る。壁周溝の位置から竪穴住居の規模は南北1.6m以上、東西4.3mを想定できる。床面まで15cm前後と残りはよくない。この竪穴住居の主柱穴ははっきりしない。遺物は床面近くに破片が散在していたが量は少ない。



第10図 1・2号竪穴住居跡、3号土坑出土土器(1/3)

遺物 (第10図)

3～6が坏身である。3は口縁部から底部にかけて明瞭な稜を残す。口縁先端は内湾し、底部は欠くが不安定である。口径は14.7を測る。4～6は3に比べ器高が高い。いずれも口縁部先端は内湾する。4・6は口縁部から底部にかけて明瞭な稜を残す。口径は12.7cm、13.9cm、13.7cmを測る。10は皿の口縁部である。口縁部先端は短く、「く」の字状に屈折する。

2号B 竪穴住居 (第9図)

この竪穴住居は方形または長方形プランと考えられる。竪穴住居の規模は南北が2.7m以上、東西は4.7mを測る。検出面から床面までは10cm前後と残りはよくない。支柱穴はP1・2が該当することから4本柱と考えられる。また、東側は3号土坑により一部切られている。竪穴住居からの遺物の出土はほとんどなく、破片が数点出土した程度である。

2号C 竪穴住居 (第9図)

床面がしっかりしていたので竪穴住居と想定しているが、支柱穴などが確認できていないのではっきりはしない。遺物の出土はほとんどない。

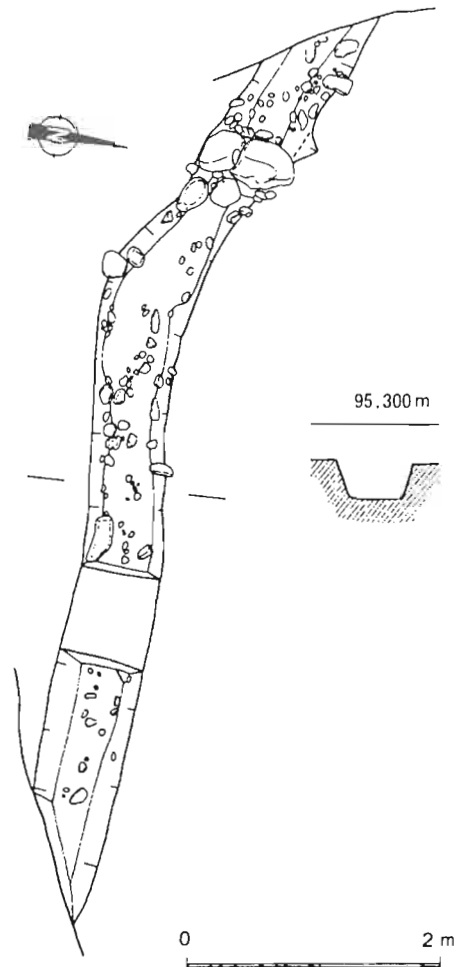
1号土坑 (第9・10図)

2号B 竪穴住居の東側で検出した土坑で南北1.15m、東西1.26mを測る。土坑内には拳大から頭よりも大きな河原石がみられる。石の除去が困難であったため、完掘は行っていない。

遺物は土坑の上面より、第10図11に示す甕が出土している。口縁部は「く」の字状に外反する。

1号溝 (第7・10・11図)

調査区をほぼ東西に走る溝で、北側でわずかに「く」の字状に屈折する。長さ約15cmを確認し、検出面での幅は1～1.5m、底面の幅が40cm～90cm、深さは50cm前後を測る。溝の断面は逆台形を呈している。溝には地山が礫混じりの土質であることから、法面や底面には溝を掘

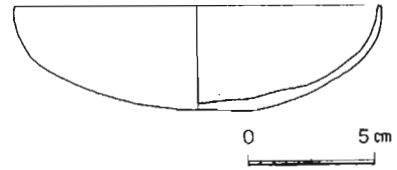


第11図 1号溝実測図(1/120)

削の際に取り除けなかった大きな礫がそのままの状態に残っている。

この溝の埋土は7層に分けられ、最下層には粘土質の土が堆積していた。その上層では土器などの遺物のほかに地山礫を多く含んでいた。さらに上層では幅が50cm、深さ20cmほどの逆台形をなす、溝の堀直し痕跡が確認されている。

溝の中からは遺物の出土が少なく、しかも上層からの出土である。(第12図)



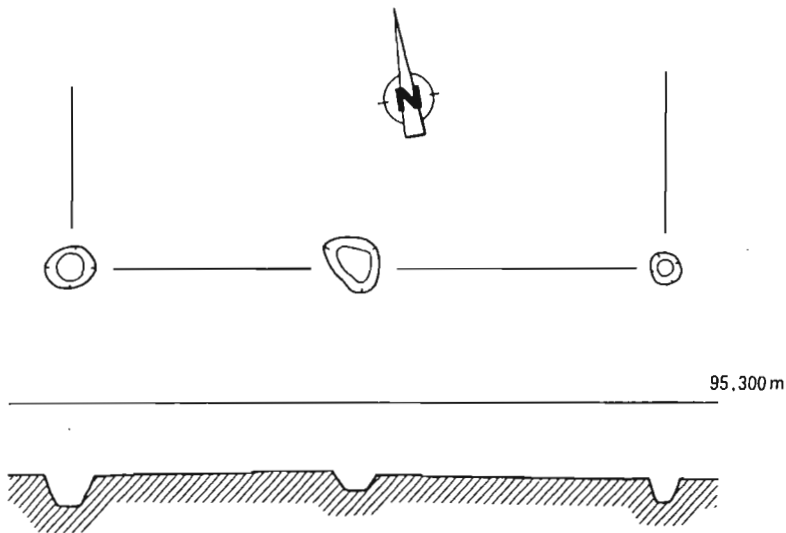
第12図 1号溝出土土器(1/3)

遺物

坏身で、口縁部は垂直に立上がり、底部は不安定である。口径14.5cm、器高4.5cm。

1号建物 (第13図)

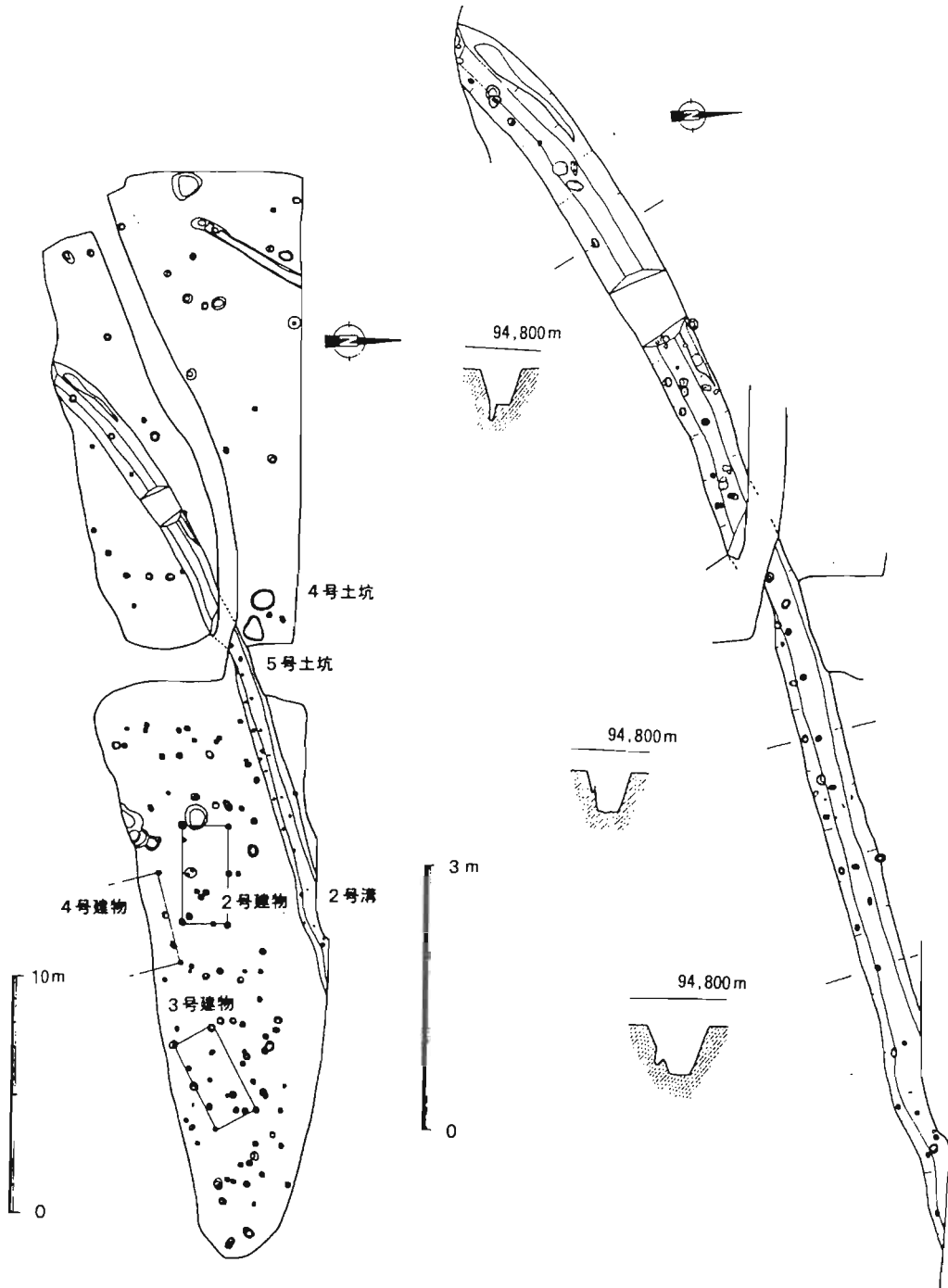
2号竪穴住居の西側で確認できた。柵列の可能性も考えられるが、ここでは2間×1間以上の掘立柱建物の一部として考えたい。柱間寸法は155cmと165cmを測る。柱穴の径は16~25cm、深さは12~27cmを測る。柱穴の中からは遺物の出土はない。



第13図 1号建物実測図(1/40)

(4) IV区の調査 (第14図)

この調査区では現水田面下で遺構面の確認できた。遺構としては第14図のとおり溝2条、掘立柱建物2棟、土坑6基、柱穴多数を検出している。このうち、4・5号土坑のある場所は水田の段差により削平が著しかった。



第14図 IV区遺構配置図(1/300)

第15図 2号溝実測図(1/160)

2号溝 (第15図)

調査区をほぼ東西に横切る溝で、緩やかな弧状をなす。総延長で約30cmを検出している。溝の幅は検出面上面で1m～1.4m、底面は30cm～60cm、深さは50cm前後を測る。溝の断面は逆台形である。溝の法面から底面にかけて径が5～10cmほどの小ピットが確認された。この小ピットは概ね70cm前後の間隔をもって掘られており、埋土の状況から溝に伴うものと考えられる。法面の小ピットは斜めに、床面の小ピットは真っ直ぐに掘られ、なかには法面と床面の小ピットが並ぶように掘られている例もある。

この溝の埋土は5層に分けられ、最下層には粘土質の土が堆積している。溝からの遺物の出土量は少なく、弥生土器や須恵器などの土器片が出土しているが図示できるような資料はない。このほか、拳大から頭大の礫が溝の上面を中心にみられた。

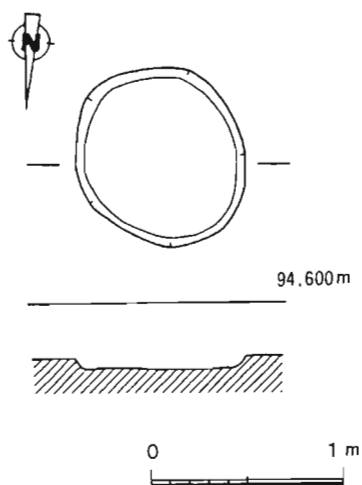
4号土坑 (第16図)

直径90cmの円形を呈する土坑で、深さは10cmほどで残りはよくない。遺物の出土はないが、埋土の状況から近世以前の時期が考えられる。

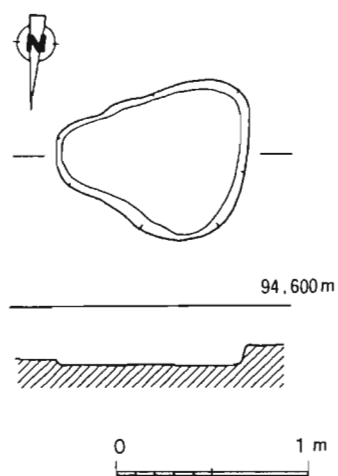
5号土坑 (第17図)

4号土坑の東側で検出した。不整形なプランをなし、深さは10cmほどで残りはよくない。4号土坑と同様に遺物の出土はないが、埋土の状況から近世以前の時期が考えられる。

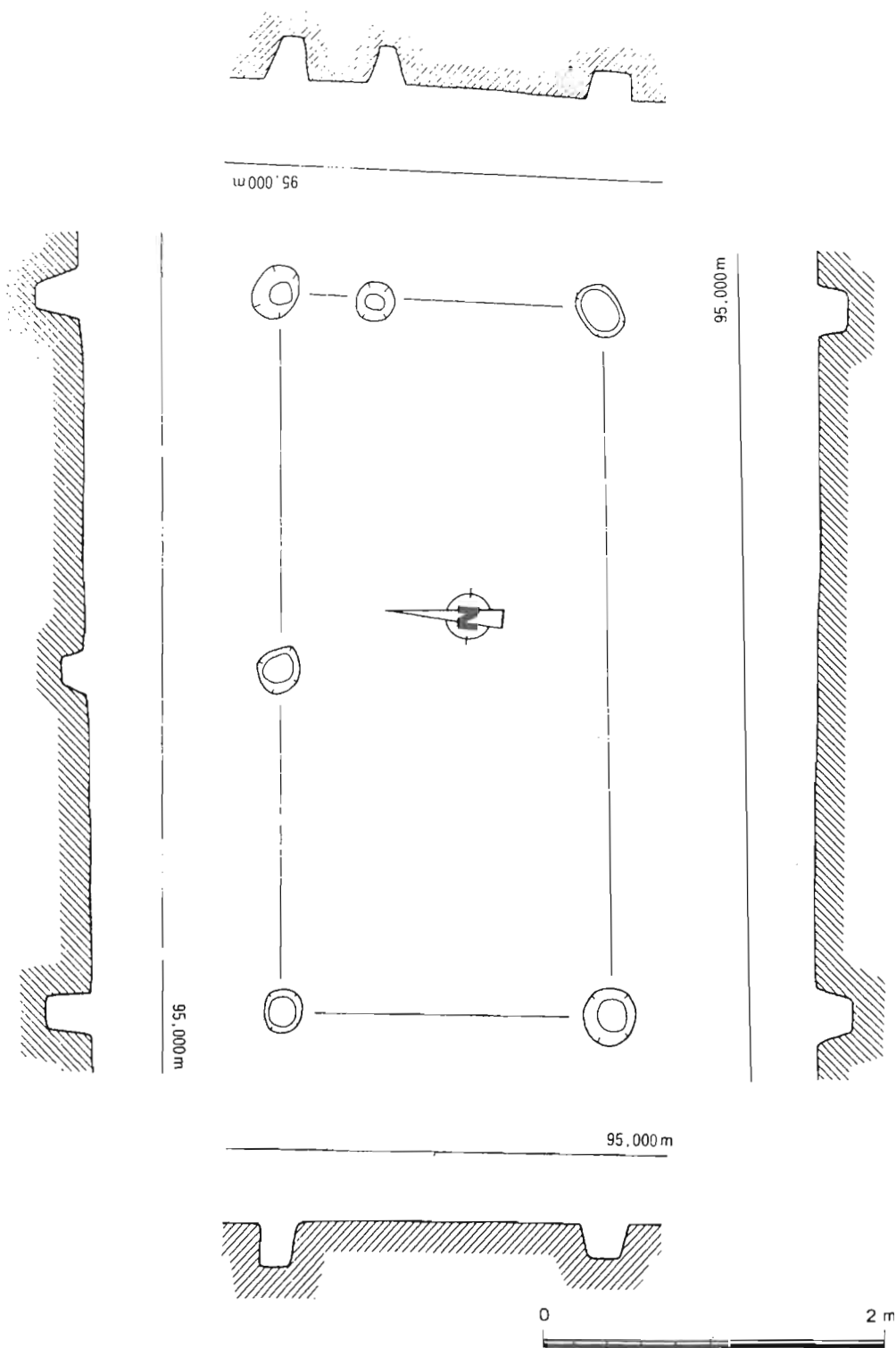
このほか3基の土坑が検出されているが遺物の出土がなく、埋土の状況から4号建物西側の土坑は近代、2号建物西側土坑と調査区西側の隅の土坑は近世以降の所産と考えられる。



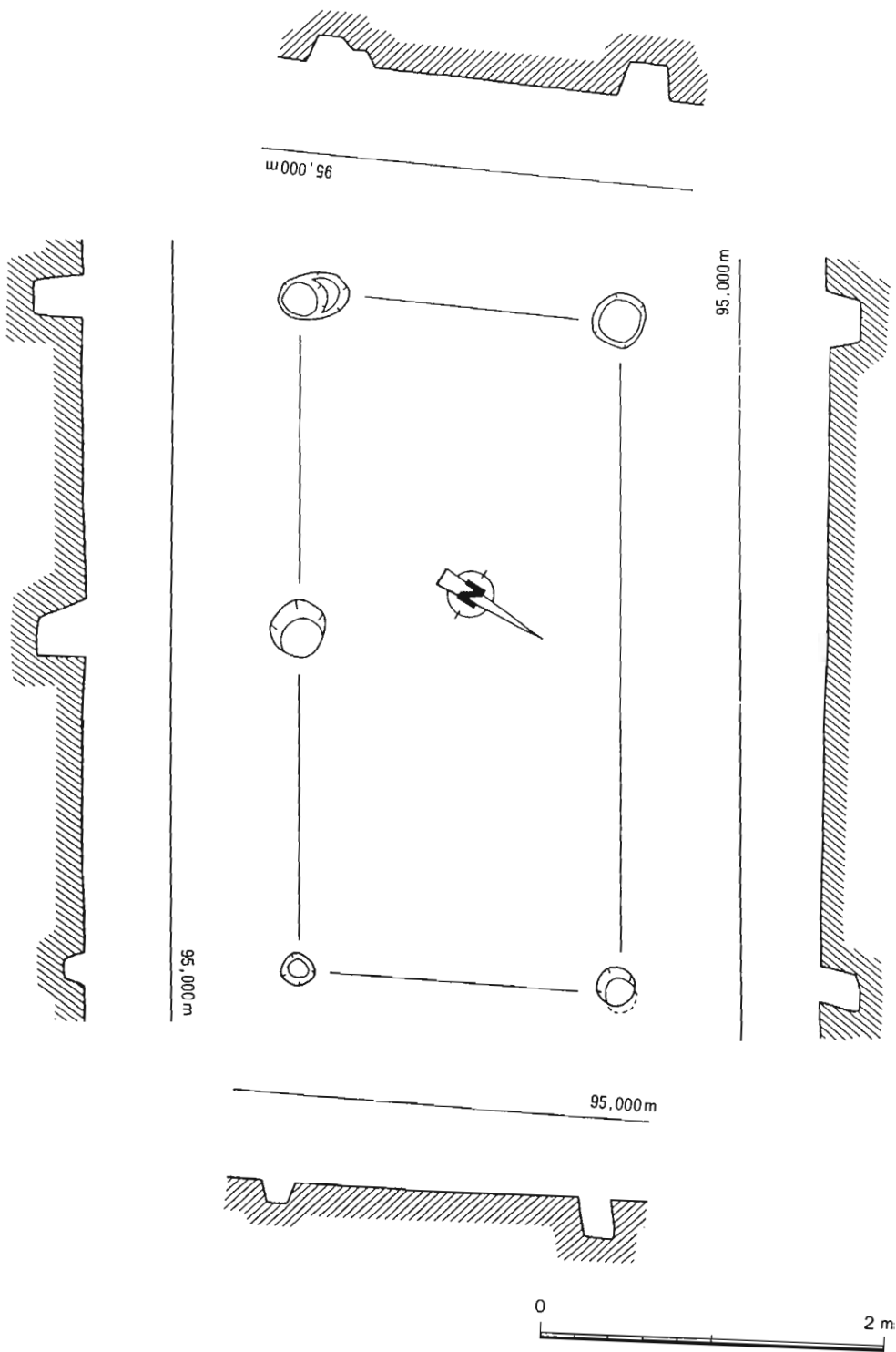
第16図 4号土坑実測図(1/40)



第17図 5号土坑実測図(1/40)



第18図 2号建物実測図(1/40)



第19图 3号建物实测图(1/40)

2号建物 (第18図)

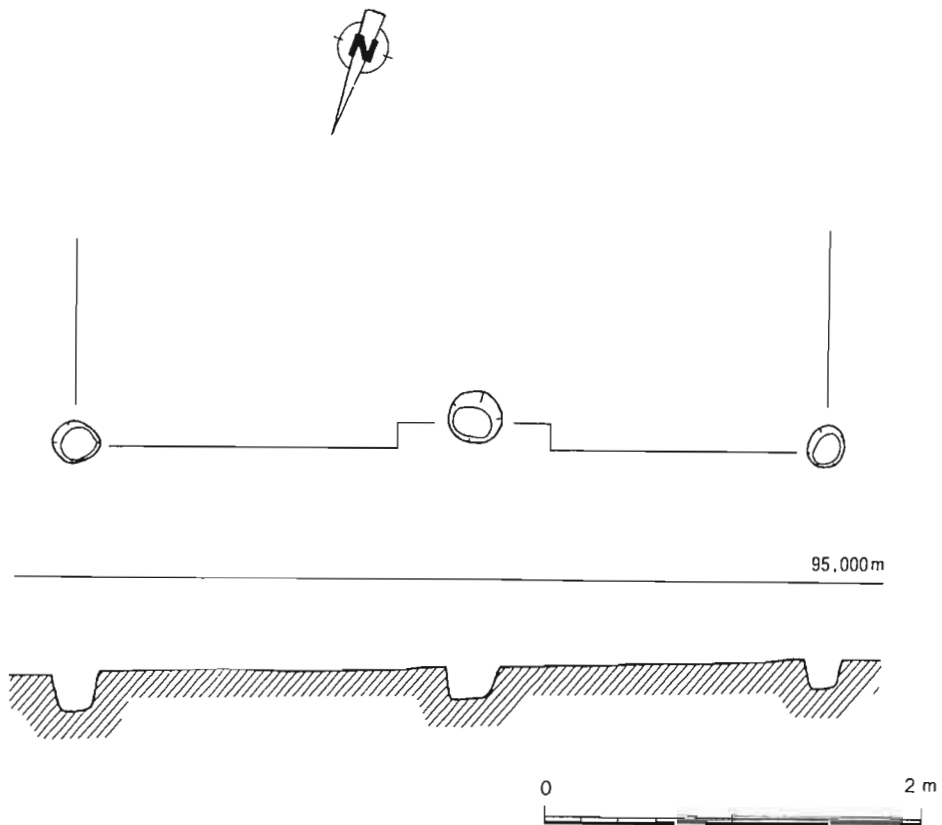
調査区の東側で検出した。梁行1間×桁行2間の5本柱である。柱穴の掘り形は円形と楕円形で、素掘りである。径は23~35cmで、深さは15~27cmを測る。規模は平均で梁行190cm×桁行420cmである。遺物の出土はない。

3号建物 (第19図)

2号建物の東側で検出した。梁行1間×桁行2間の5本柱である。柱穴の掘り形は円形と楕円形で、素掘りと二段掘りである。径は18~34cmで、深さは13~30cmを測る。規模は平均で梁行185cm×桁行390cmである。遺物の出土はない。

4号建物 (第20図)

2号建物の南側で検出した。2間×1間以上の建物と想定される。柱穴の掘り形は円形と楕円形で、素掘りである。径は20~29cmで、深さは18cm前後を測る。規模は平均で400cm×120cm以上である。遺物の出土はない。



第20図 4号建物実測図(1/40)

(5) V区の調査 (第21図)

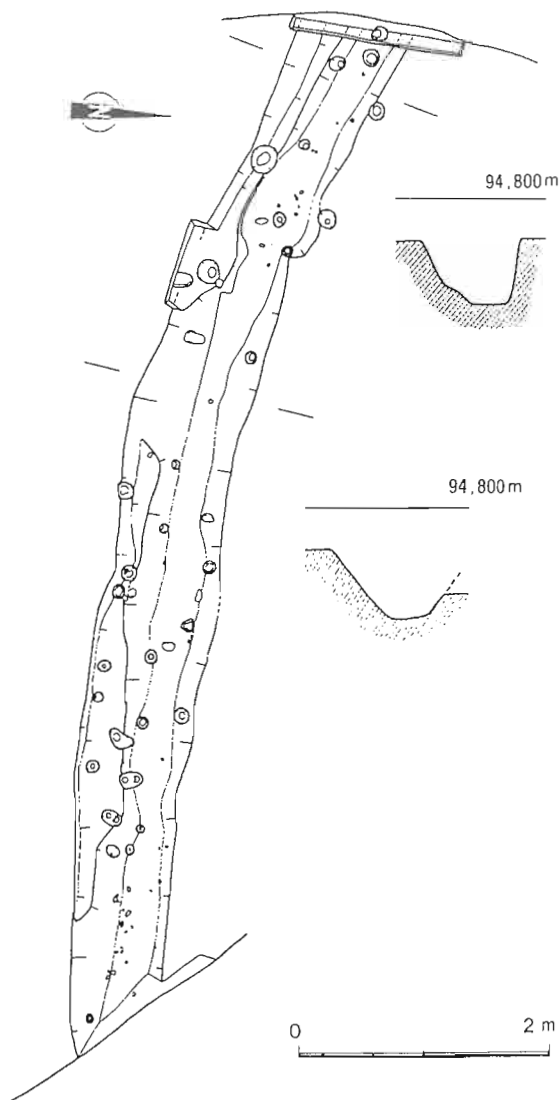
この調査区では3号溝の南側では現水田面除去後に遺構が確認できたが、その北側では遺構の上に黒色の土器包含層が堆積していた。黒色の土器包含層についてはⅡ区にみられるものと同様な在り方を示している。この黒色の土器包含層は同一の厚さによる堆積ではなく、北側へ



第21図 V区遺構配置図(1/300)

向かうにつれ深くなっている。このことは、旧地形が北側に向かって低くなっている状況を考慮すると、現水田の整地との関わりが考えられる。

ここでは、溝4条、掘立柱建物4棟、土坑2基、柱穴多数を検出しているが、3・4号溝を除く東西に走る溝は、その埋土や少ない出土遺物からみて近世以降の溝と考えられ、深さも浅く残りはよくない。



第22図 3号溝実測図(1/120)

3号溝

調査区を東西に横切る溝で、わずかに弧状を呈しながら調査区外へと延びている。溝は延長で約17mを検出し、幅は検出面上面で160~180cm、底面のは57cm~100cm、深さは約1m前後を測る。

溝の断面形態は場所によって異なるが逆台形または「U」字状をなす。溝の法面にはところどころに小ピットが見られる。

埋土は大きく3層にわけられ、自然の埋没であったことがわかる。また、溝の床面には鉄分の付着がみられ、水痕跡を知ることができる。

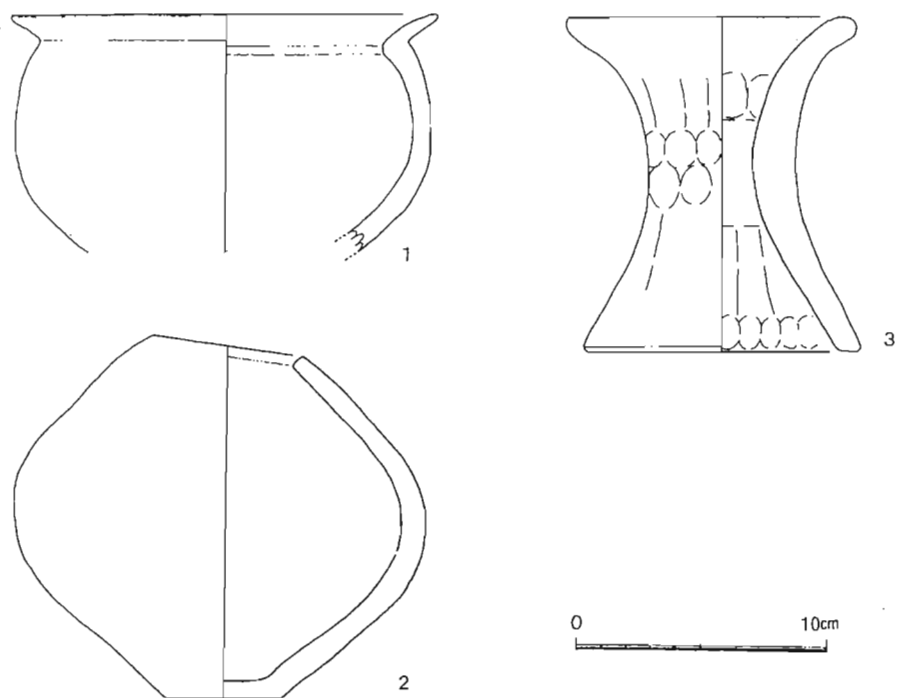
溝の中からの出土遺物は大きく上・下層に分けることができるが、総じて遺物の出土量は少ない。上層には弥生土器や8世紀の須恵器、中世の青磁・白磁などが混在して出土しており、これは溝の上面にある黒色の土器包含層の遺物の混入である。下層からは弥生土器が出土している。こうした、上・下層の出土土器は破片が多く、大半はローリングをうけて丸みをおびている。

3号溝出土遺物 (第23図)

ここでは、溝の下層から出土した遺物のうち、実測可能な土器を掲載する

1は、甕もしくは脚付鉢の一部である。口縁部は短く、「く」の字状に外反する。内外面ともハケ後ナデ仕上げ。口縁径は復元で17.2cm。

2は、長頸壺の一部である。口縁部はなく、胴部のみが残る。最大径は丸みを



第23図 3号溝出土土器実測図(1/3)

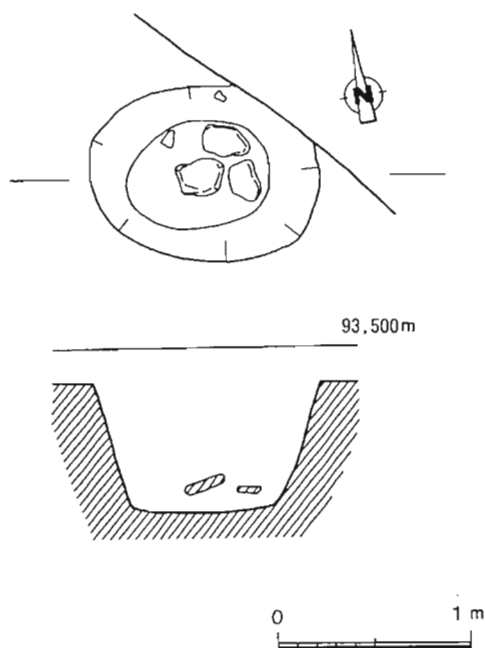
おびた胴部中央にあり16.6cm、底部は平底で径4.8cmを測る。内外面ともハケ後ナデ仕上げ。

3は、器台である。裾径11cmに対してして口径11.4cmがわずかに広い。器高は13.3cmを測る。内外面ともナデと一部指圧痕仕上げ。

このほかに図示はしていないが、外面に粗いタタキを施した長胴甕の破片が相伴している。

4号溝

この溝は削平を受けいていると考えられ残りはよくない。巾約60cm前後を計る。遺跡の出土はない。



第24図 6号土坑実測図(1/40)

6号土坑 (第24図)

調査区の東側隅で検出した。

土坑は平面プランが楕円形を呈し、長軸120cm、短軸93cm、深さ70cmを測る。土坑内からは少量の遺物が出土したほか、床面近くに3個の河原石が認められた。

遺物は弥生土器の破片が出土しているが摩滅がひどく、流れ込みの可能性はある。埋土の状況からして、中世以降の所産と考えられる。

7号土坑 (第25図)

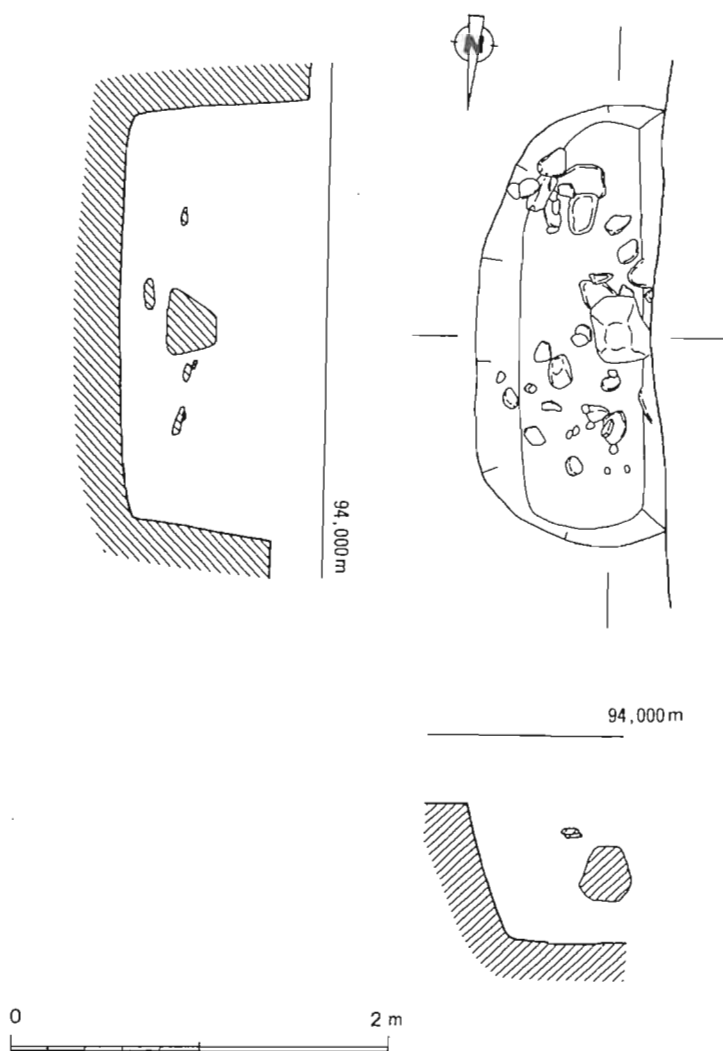
調査区の北西側隅で検出した。

土坑はその約半分を検出し、調査区外に広がるため全容は把握できないが、平面プランは楕円形をなすと推定される。

土坑の規模は長軸が234cm、短軸が93cm以上、深さは95cmを測る。

土坑内からは少量の遺物のほか、大小さまざまな河原石が認められた。遺物には弥生土器や須恵器、近世の染付などがみられるが、いずれも破片でほとんどが流れ込みである。

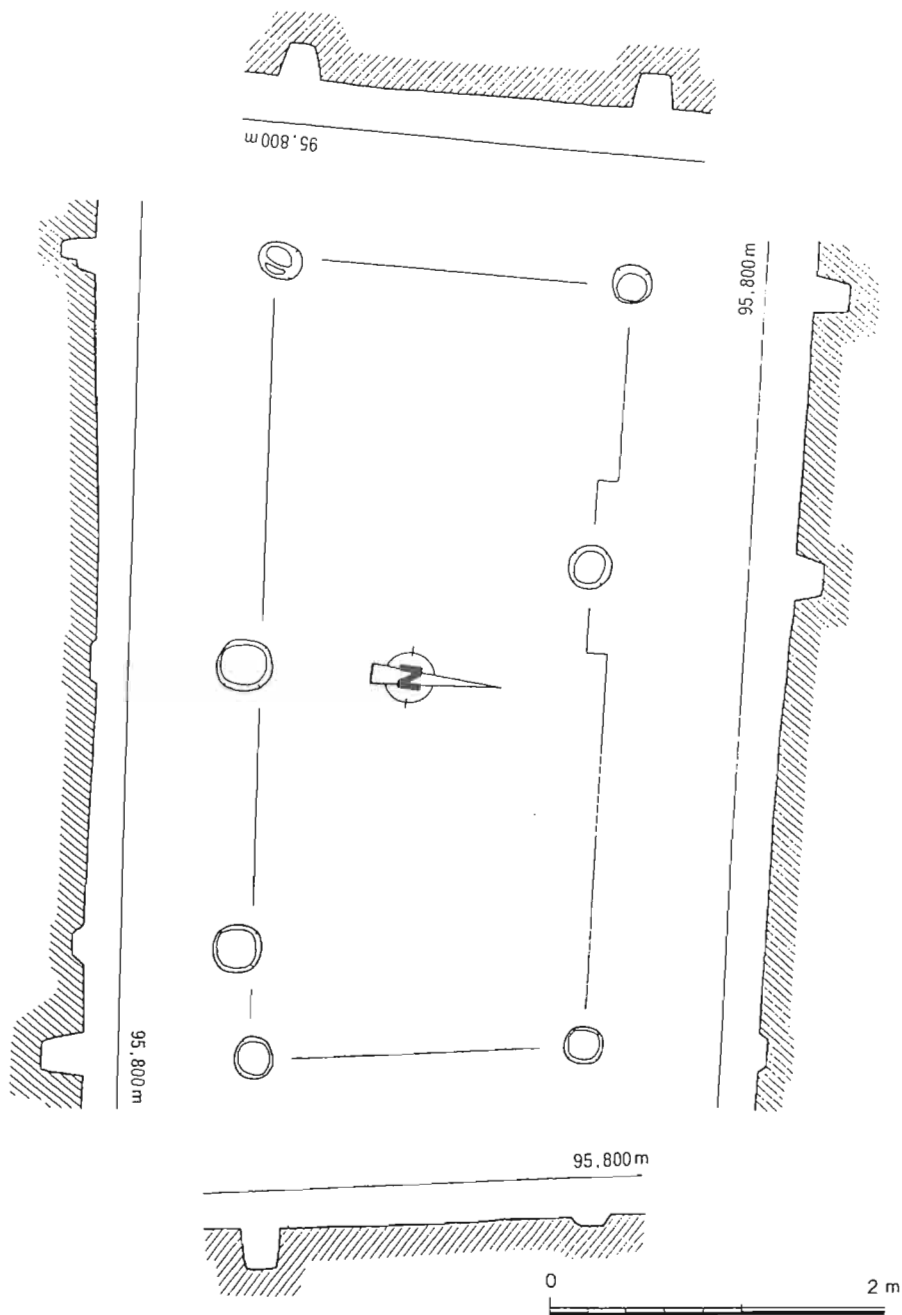
埋土の状況からしてこの土坑は、近世以降の所産と考えられる。



第25図 7号土坑実測図(1/40)

5号建物（第26図）

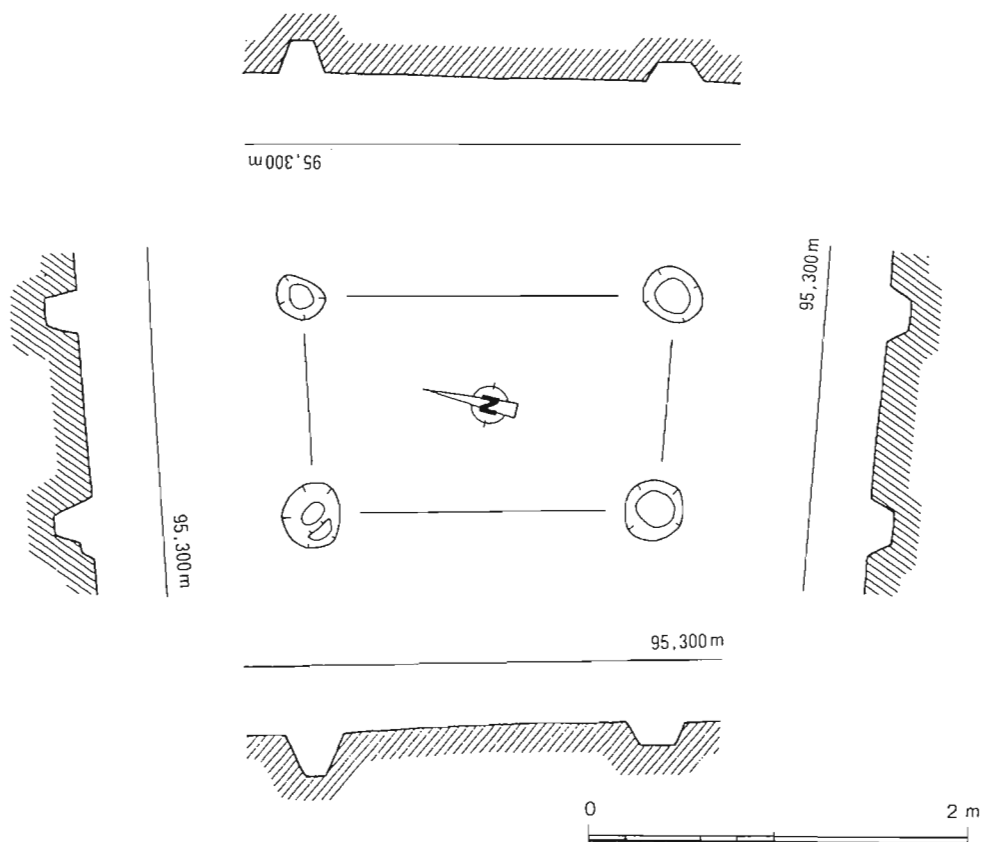
調査区の西側で検出した。梁行1間×桁行2間で、6本柱と考えられる。柱穴の掘り形は円形で、素掘りと二段掘りである。径は20~38cmで、深さは5~23cmを測る。規模は平均で梁行180cm×桁行415cmである。遺物の出土はない。



第26図 5号建物実測図(1/40)

6号建物 (第27図)

調査区の東側で検出した。梁行1間×桁行1間の長方形プランの4本柱である。柱穴の掘り形は円形と楕円形で、素掘りと二段掘りである。径は20~35cmで、深さは10~23cmを測る。規模は平均で梁行115cm×桁行190cmである。遺物の出土はない。



第27図 6号建物実測図(1/40)

(6) 惣田遺跡の出土遺物

ここでは各調査区から出土した土器や石器など遺物紹介を行う。

1. 弥生土器 (第28図)

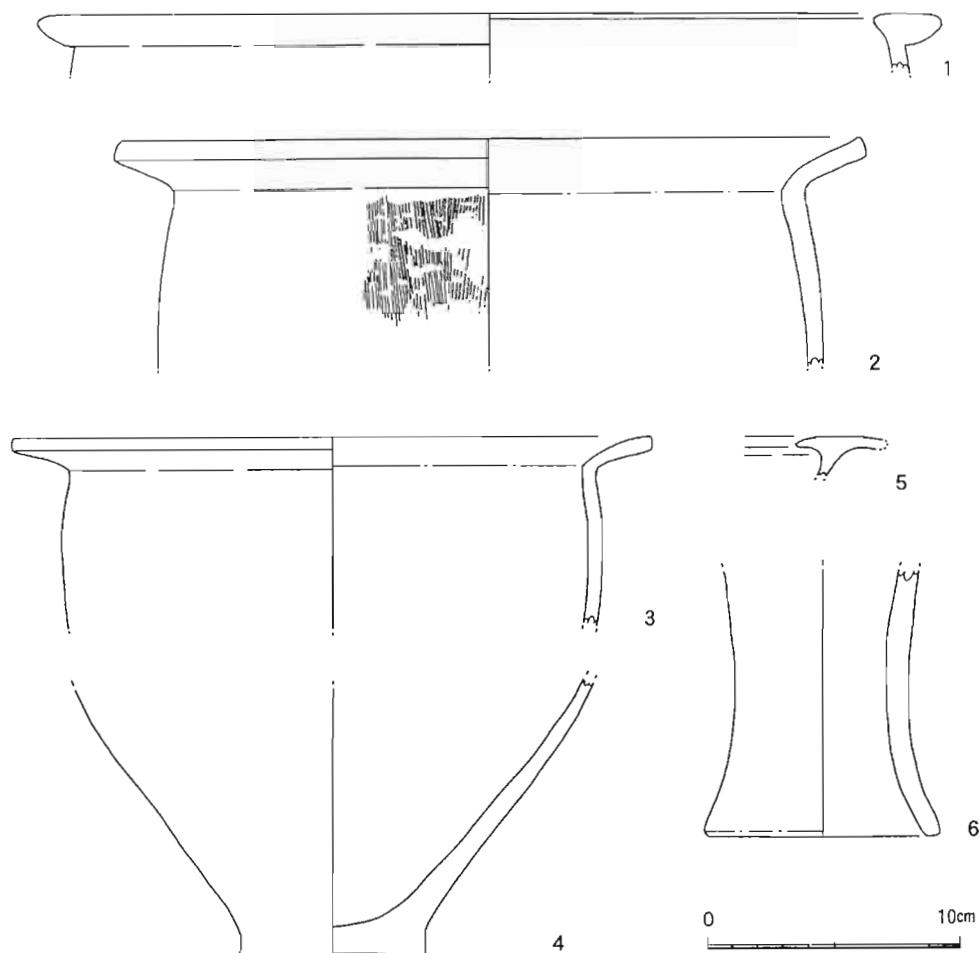
1は逆し字形の口縁部を有する甕である。口径は36.4cmを測る。Ⅳ区2号溝出土。

2・3も甕で、口縁部が「く」の字状を呈する。外面のハケ調整。口径は2が29.6cm、3が25.6cmを測る。2はⅡ区表採、3はⅠ区包含層出土。

4は甕の底部である。1.1cmの厚みがあり、平底をなし、径は3.8cmを測る。Ⅰ区表採包含層出土。

5は「T」字状の口縁部を有する高坏である。Ⅰ区包含層出土。

6は器台である。裾径は9.4cmを測る。Ⅰ区包含層出土。



第28図 遺跡出土の弥生土器実測図(1/3)

2. 須恵器・土師器 (第 29 図)

1・2は須恵器の坏身である。いずれも高台を有する。IV区3号溝上部の包含層出土。

3は須恵器の甕である。口縁部が朝顔状に開き、端部に一段の稜を有する。復元口径は13.1cmを測る。III区3号溝上部の包含層出土。

4は坏身である。口縁部の端部が内湾する。復元口径は14cmを測る。IV区3号溝上部の包含層出土。

このほかにも、V区3号溝上部の包含層より須恵器の坏身の口縁部などが出土している。

3. 中世土師器 (第 30 図)

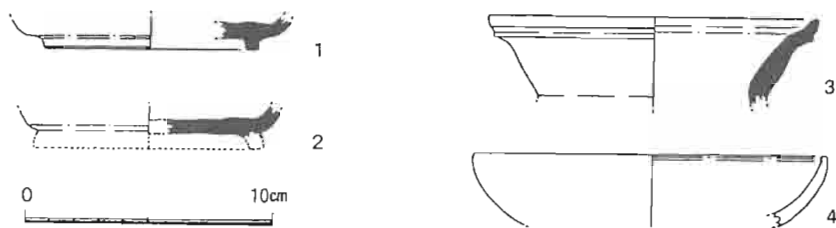
1～3は坏である。1は底部の復元径6.8cmを測る。内面ナデ調整、底部外面は糸切りである。2は底部の復元径9.4cmを測る。内面ナデ調整、底部外面は糸切りである。3は底部の復元径9cmを測る。内面ナデ調整、底部外面は糸切りである。いずれもI区包含層出土。

このほかにも破片であるが、V区3号溝上部の包含層からは青磁や白磁などが出土している。

4. 石器 (第 31・32 図)

第31図は石鏃である。脚の一方が欠損している。先端は細く仕上げている。最大長1.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cmを測る。黒耀石製。V区出土。

第32図は打製石斧である。1は両端が欠損する。現存長5.6cm、幅4.5cmを測る。



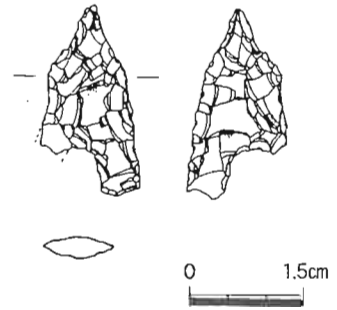
第29図 遺跡出土の須恵器・土師器実測図(1/3)



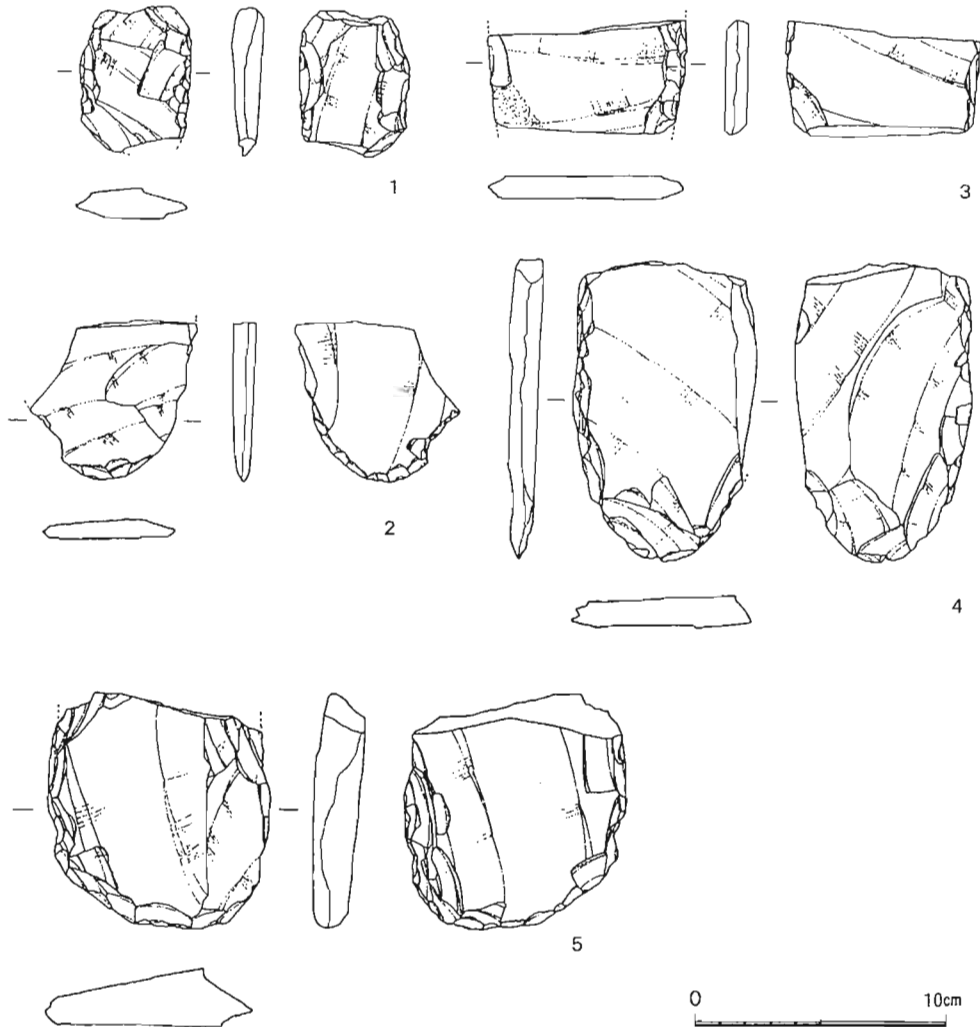
第30図 遺跡出土の中世土師器実測図(1/3)

I区包含層出土。2も欠損品である。加工は周辺にのみ施されている。V区3号溝上部の包含層出土。3は両端が欠損する。幅7.8cmを測る。V区出土。4は上部が欠損する。偏平で加工も丁寧である。現存長12.2cm、現存幅7cm、1.2cmを測る。IV区表採。5は厚味がある。現存長9cm、幅8.8cm、2.3cmを測る。V区3号溝出土。

このほか姫島や腰岳産の石器に混じって、大山産の黒耀石の原石などが出土している。



第31図 遺跡出土の石器実測図1(1/1)



第32図 遺跡出土の石器実測図2(1/3)

IV まとめ

今回、惣田遺跡の調査は試掘調査段階から調査予定地の近くに惣田塚古墳が存在することから、関連する時期の遺構や遺物を想定して開始した。ところが、調査では惣田塚古墳に関連する時期の資料は確認できず、他の時代の遺構が検出された。このことは、高瀬川と三隈川に挟まれた平地部分に限っては、古墳と同期の集落は今回の調査区よりさらに南側の山裾に求めるか、あるいは調査区北側ということになり、今後の周辺調査に委ねることとなった。

調査結果についてまとめると、調査区内での遺構密度は全体的に稀薄であったといえる。これはⅡ・Ⅴ区での土器包含層や各遺構の深さが浅いことを考慮すると、後世における水田化に伴う削平の結果としてとらえることができる。

調査で発見された遺構の年代については、まず弥生時代の遺構として、Ⅴ区の3号溝が考えられる。この溝の上層からは奈良時代以後の遺物が出土しているが、下層からは第23図に示す後期前半～中頃の土器が出土している。このほか、外面に粗いタタキ痕を残す長胴甕の破片も出土していることから、溝の下限を後期後半から終末頃と考えることができる。また、この溝は他の1・2号溝などが調査区南側の山裾を沿うように掘られているのとは異なり、北西側の調査区外へと延びる様相はどちらかといえば山裾とは逆方向の北側へと延びそうである。この溝と同一時期の遺構ははっきりつかめていないが、出土している土器からその存在は明らかで、この溝は環濠としての機能を果たしていたのかもしれない。今後の調査に期待したい。この他、遺物は出土していないが1間×1間の規模をなす6号建物も中期～後期の所産である可能性が高く、Ⅰ区C地点1・2号土坑は中期の範疇でおさまりそうである。

次に、古墳時代から奈良時代頃の遺構としてはⅢ区1・2号竪穴住居が該当する。Ⅲ区1号竪穴住居ではその東側に2ヶ所のカマドが検出された。その前後関係は2号カマドとその南側に位置する不整形な土坑が竪穴住居の床面下で確認されたことから、2号カマド→1号カマドという変遷が追え、住居の建て替えに伴い住居の拡張が行われたことがわかる。この竪穴住居から出土した土器を見ると、甕の内面は口縁部と胴部の境が明瞭で、しかも杯の口縁は稜が付き内湾するなどの特徴から、7C後半～8C前半頃の所産と考えられる。Ⅲ区2号竪穴住居もその切り合い関係からすると3回の住居の建て替えが行われ先後関係は2B・C号竪穴住居→2号A竪穴住居である。またⅢ区1号土坑も同一時期と考えられ、Ⅲ区1号溝については上層から出土した土器がやや古相を呈することから、その掘削時期は溯りそうである。この1号溝についてはその形態や方向などからすると、Ⅳ区2号溝やⅤ区4号溝に続くと推定され、全体的には山裾の自然地形に沿うように大きく蛇行しながら走ると考えられる。

この他、Ⅳ区2～4号建物やⅤ区5号建物などの遺構からは遺物の出土がなく、どの時期に位置付けられるかは不明であるが、埋土の状況から古代～中世の時期に該当しそうである。

写 真 图 版

惣田遺跡調査区空中写真
(北東方向から)

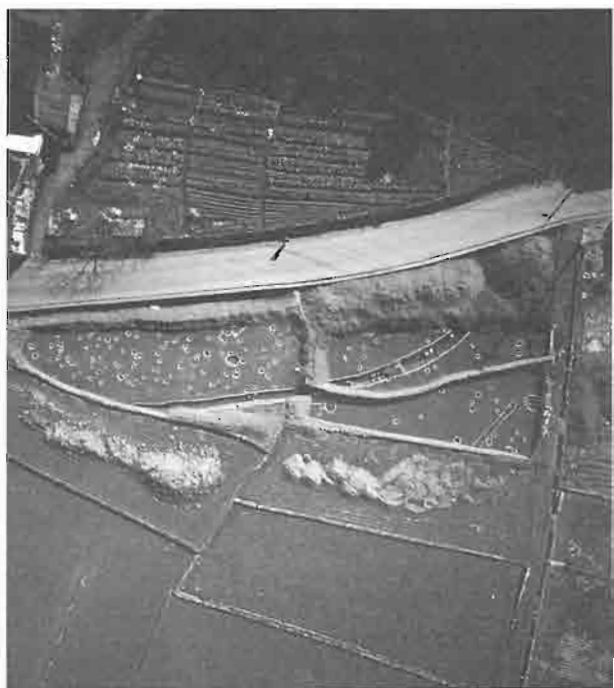


惣田遺跡調査区空中写真
(真上から)



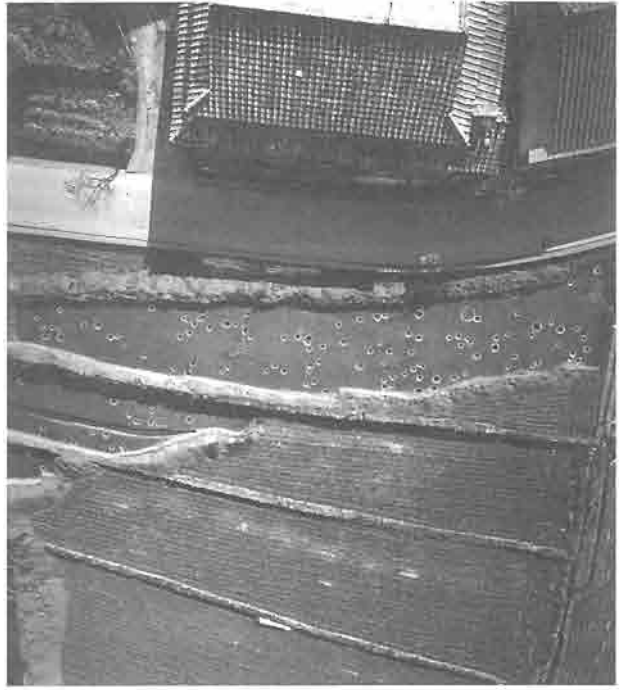


惣田遺跡Ⅲ区空中写真
(真上から)



惣田遺跡Ⅳ区空中写真
(真上から)

惣田遺跡V区空中写真
(真上から)



惣田遺跡V区空中写真
(真上から)





惣田遺跡Ⅲ区1、2号竪穴住居跡完掘写真
(西より)



惣田遺跡Ⅲ区
1号竪穴住居跡
カマド完掘写真



惣田遺跡Ⅲ区
全景写真
(東より)

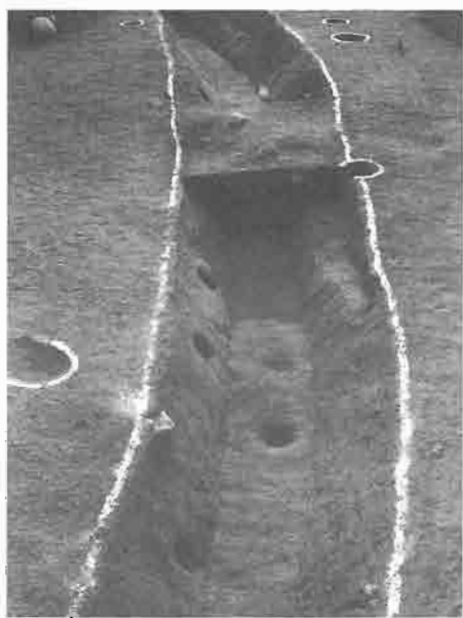
惣田遺跡Ⅳ区
全景写真
(西より)



惣田遺跡Ⅳ区
2号溝掘下作業風景



惣田遺跡Ⅳ区 2号溝完掘写真

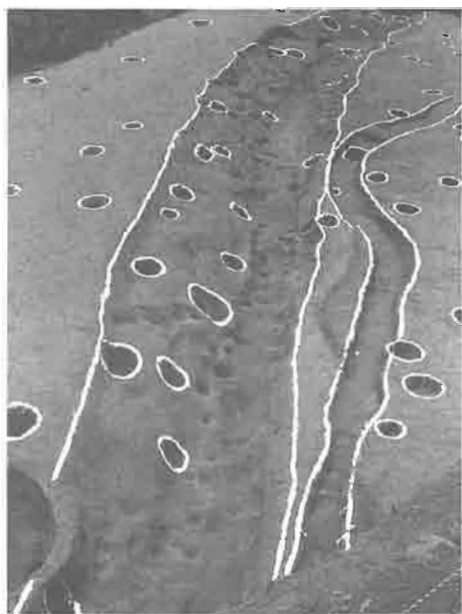




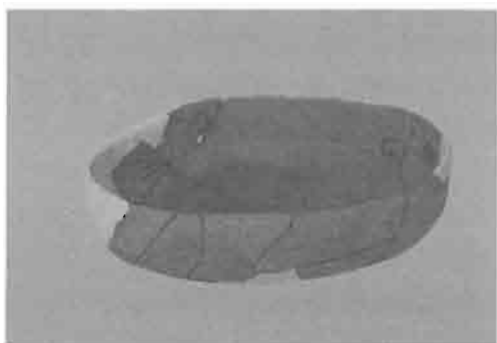
惣田遺跡Ⅴ区
3号溝掘下作業風景
(東より)



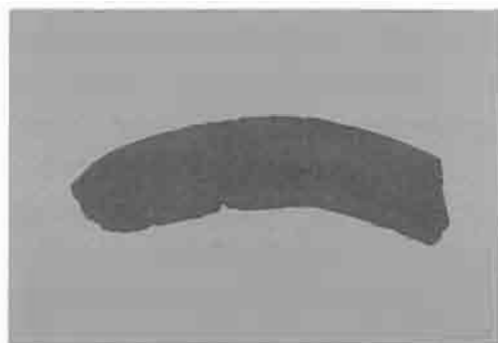
惣田遺跡Ⅴ区
3号溝完掘写真
(東より)



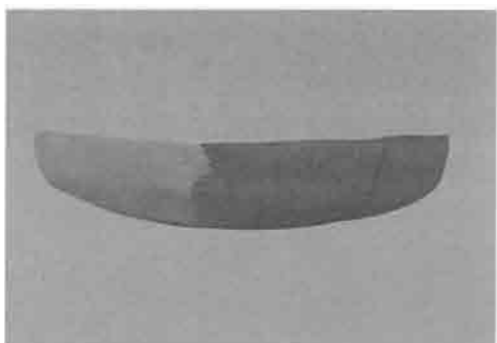
惣田遺跡Ⅴ区3号溝完掘写真(北より)



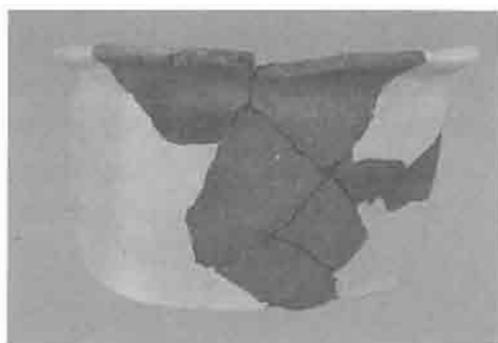
1



5



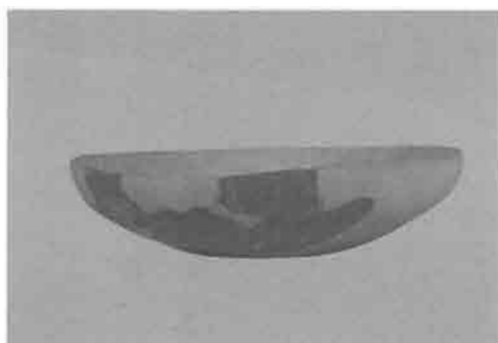
2



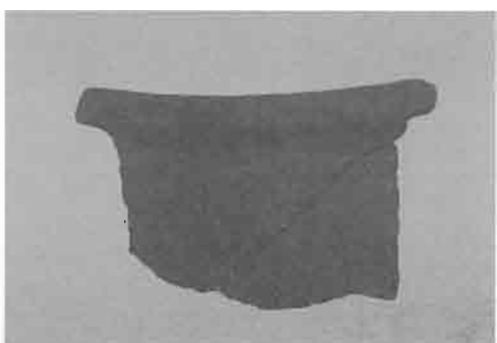
6



3

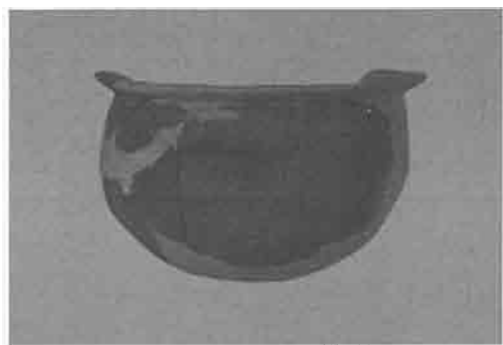


7

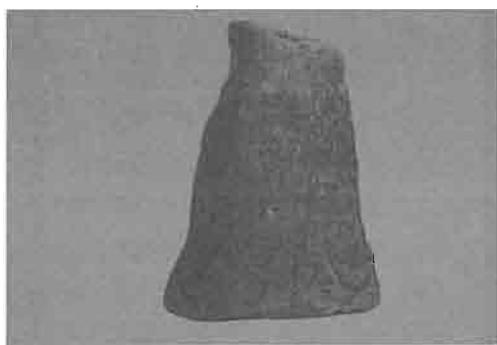


4

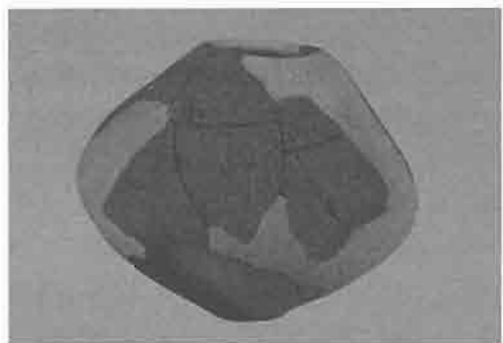
1·4~6 I区1号住
2·3 I区2号住
7 I区1号沟



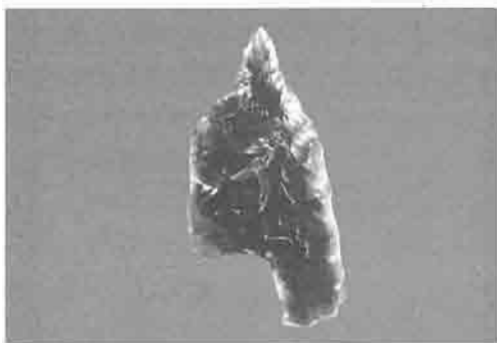
8



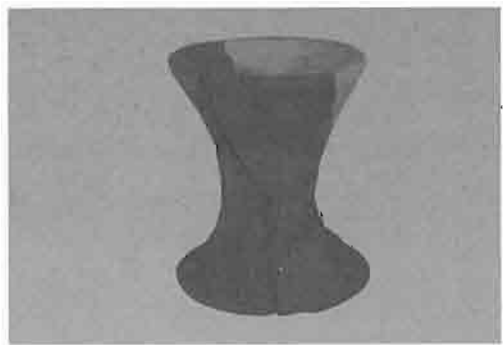
12



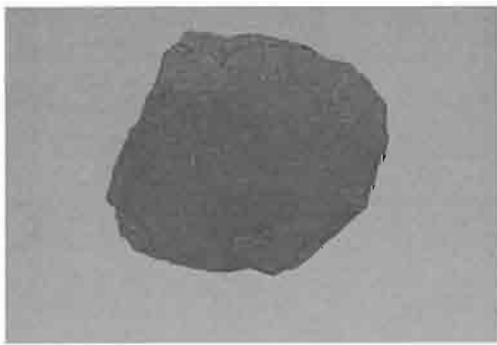
9



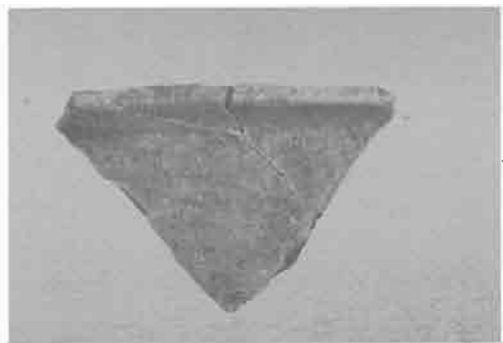
13



10



14



11

8~10 V区3号溝
11~14 一括造物

付編1 そうだづか 惣田塚古墳

位置 (第33図)

惣田塚古墳は日田市街地より南東の日田市琴平町983番地に所在する。古墳の北側には筑後川(三隈川)、すぐ西側にはその支流である高瀬川が北流しており、古墳はその河岸段丘上に立地する。古墳の標高は約98mを測り、周辺は現在水田となっている。

現状 (第34図)

これまでこの古墳は市内にあっては石室が開口し内部の様子を窺い知ることができる数少ない古墳の一つであった。今回、惣田遺跡の発掘調査に伴い現状の墳丘測量を行った結果、これまで古墳の墳丘と考えられていた盛土の大半は、ボーリングを行ったところ拳大の河原石が積まれていたことがわかり、本来の墳丘は既に大半が失われ後世に現況のごとく盛られたと推定される。天井石は露出し、その上には墓石が残る。羨道部は破壊され、石室の東側は一部露出し、壊れた部分には円礫の河原石が積まれている。

主体部 (第35図)

内部主体は主軸方位をN-62°-Eにとる両袖複室の横穴式石室である。石室内部には土砂が流入しており、少なくとも50cm以上の堆積があると思われる。このため、本来の床面の状



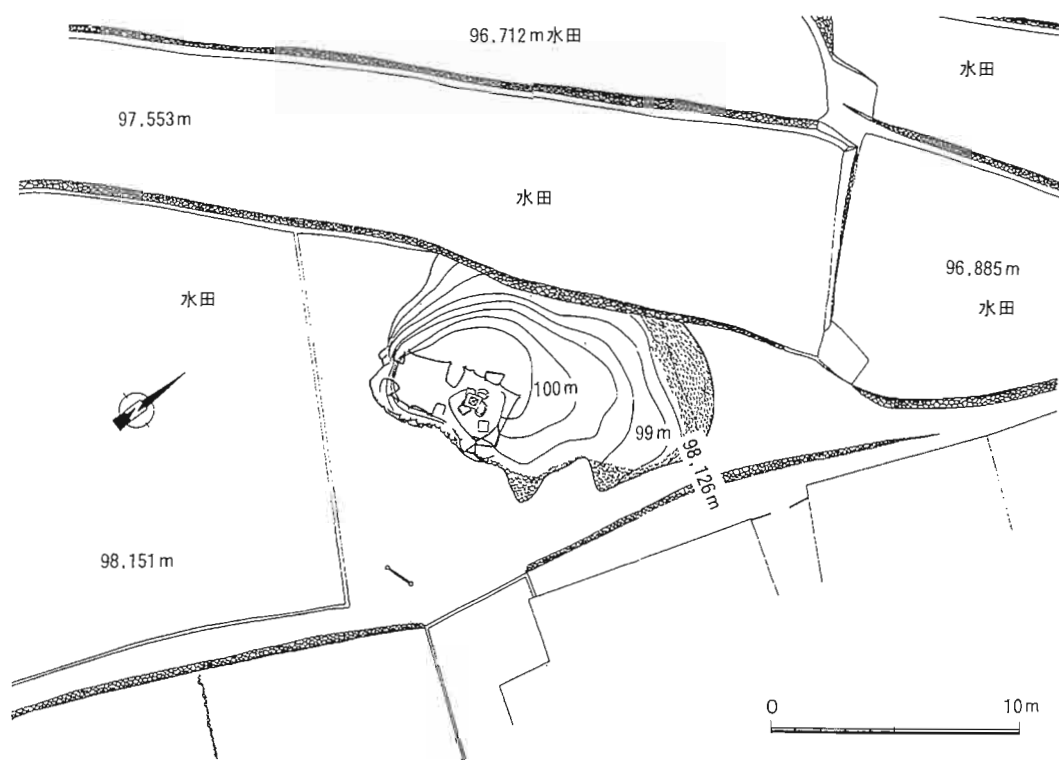
第33図 惣田塚古墳位置図(1/5,000)

況は把握することはできず、また玄室右壁の一部は破壊を受けている。こうしたことを踏まえた石室の現状規模は、まず玄室は奥幅212cm、前幅200cm+ α 、左壁長233cm、右壁長210cm+ α を測る。前幅に対して奥幅がやや狭い方形に近い平面プランを呈す。奥壁には表面をほぼ平坦に加工した高さ150cm以上の鏡石を使用しており、内側に傾くよう据えている。その上部には平積み of 石を石棚状に突出させ、一枚の天井石を支えている。天井石までの高さは現状で175cmを測る。側壁は1ないし2枚の腰石を使って基底部を作り、その上に大きさの異なる石を持ち送りとなるよう積み上げ、それらの隙間を小さな平石で埋めている。

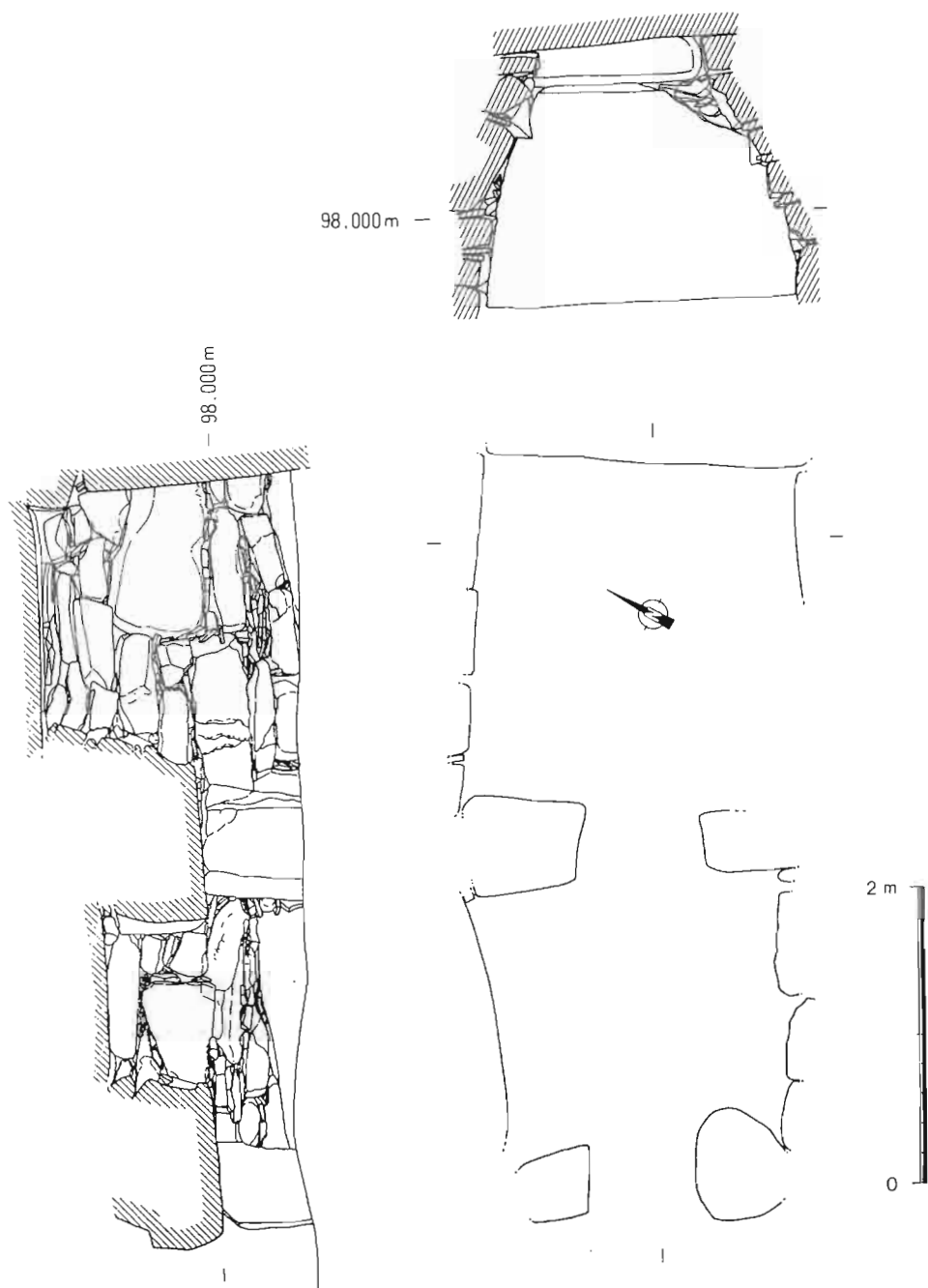
前室は奥幅211cm、前幅186cm、左右壁長とも183cmを測り、玄室と同様方形に近い平面プランを呈す。左壁には1枚の腰石からなる基底部があり、その上は大きさの異なる石を使い持ち送りとしている。右壁の基底部に腰石が使用されているかは不明であるが、左壁と同様の持ち送りがみられる。天井石は1枚石を使用しており、高さは現状で135cmを測る。

古墳の年代

古墳の年代についてはこれまで本格的な調査が行われておらず、その年代ははっきりしない。しかし主体部の構造が複室の横穴式石室で、奥壁に1枚の鏡石を用い、その上部は平積み of 石を石棚状に突出させ、側壁は切石を持ち送るなどの特徴を持つ。このような例は市内ではガランドヤ1号墳に見られ、類似している点から6世紀後半の年代が考えられそうである。



第34図 惣田塚古墳墳丘測量図(1/300)



第35図 惣田塚古墳石室実測図(1/50)



惣田塚古墳遠景
(南方向より)



惣田塚古墳近景
(南方向より)



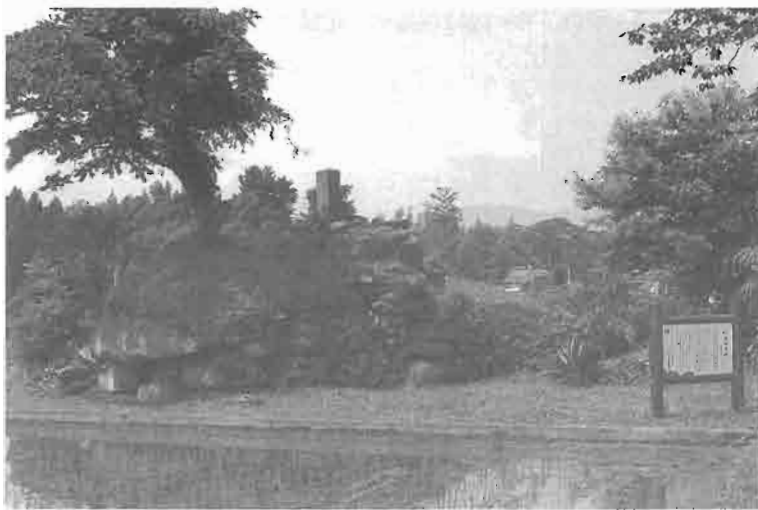
惣田塚古墳近景
(南東方向より)



惣田塚古墳近景
(南東方向より)



惣田塚古墳
正面写真



惣田塚古墳
石室写真
(前室入口より)

付編 2 高瀬地区周辺の文化財

高瀬地区はこれまでに指定文化財となっているもの8件をはじめ、天然記念物や有形文化財・史跡・埋蔵文化財など数多くの文化財が残された地区である。下表はこれまでに確認されたそれらの文化財のうち主だったものを一覧表にしたものである。

番号	名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要
天然記念物				
1	ツバキ	高瀬本町	昭和50年3月28日	樹齢400年以上
2	キンモクセイ	南部町	昭和47年6月12日	樹齢推定800年以上
有形文化財				
3	石人	銭淵町	昭和39年2月21日	伝八女市岩戸山古墳出土
4	永平寺跡板碑	高瀬本町	昭和50年3月28日	応長元年(1311)、正和2年(1313)銘あり
5	石幢	上野町	昭和50年3月28日	長禄4年(1460)銘あり
6	木造笑巖和尚坐像	琴平町	昭和47年6月12日	応永16年(1409)銘あり
7	木造阿弥陀如来像	大日町	昭和47年3月21日	応永10年(1403)銘あり
史跡・埋蔵文化財				
8	手崎遺跡	大宮町		縄文・古墳・奈良(集落)・中世(墓地)
9	惣田遺跡	琴平町		弥生・奈良・中世(集落)
10	惣田塚古墳	琴平町	平成元年11月22日	古墳(6世紀)
11	姫塚古墳	高瀬本町		古墳(5世紀)
12	高瀬遺跡	誠和町		古墳(集落)
13	陣ヶ原遺跡	誠和町		古墳・奈良(集落)
14	上野第1遺跡	上野町		奈良(集落)
15	上野切畑山遺跡	上野町		奈良・中世(集落)
16	護願寺古墳群	上野町		古墳(5～6世紀)

※番号3・7は県指定文化財、1・2・4・5・6・10は市指定文化財

1. 姫塚古墳

位置（第36図）

古墳は日田市高瀬本町に所在し、三隈川の浸食によって形成された河岸段丘上に位置している。段丘上は南部より平坦な地形が北へ向かって広がっており、古墳はその最北部に単独で存在している。古墳の眼下には三隈川を挟んで亀山公園や市街地一帯が見渡せ、さらには盆地北部の吹上台地や山田原台地も一望できる場所にある。

これまでに古墳近辺においては本格的な発掘調査がされていないため、古墳の周囲にも他に古墳が存在していたのか、またその古墳と関連した集落がどこにあるのかなどはまだわからない。

近年はこの一帯は高瀬川の上流より引き入れた水路を使用して水田が営まれていたが、市街地の発展と合わせて序々に宅地化が目立つようになり、かつては水田の中に目立っていた古墳も宅地の中に埋もれてしまった状態となっている。



第36図 姫塚古墳位置図(1/5,000)

現状（第 37, 39 図）

古墳は戦後の農道建設などによって封土の約 3 分の 2 ほどが破壊されていたが、その際に別府大学の賀川光夫教授によって調査され、2 基の竪穴式石室の存在などが明らかとなった。この時の調査の記録によれば、東側の石室はすでにほとんど失われ、石室に使われた割石の一部と扁平な蓋石が少し残されていただけであった。しかし西側の石室は南西側の壁面を一部破壊されただけでほぼ現状を保っていたようである。（第 39 図）

西側の石室の壁面は四面に扁平な割石を小口積みし、屍床部は粘土を敷き詰めて床面を構築している。この石室の寸法については内法で長さ 1.7m、幅 0.8m、高さ 0.6m を測りほぼ長方形の平面プランを測る。また蓋石には幅約 1m、厚さ約 0.1m の扁平な板石を二枚重ねて架構していたようである。

その後、昭和 62 年度に日田市教育委員会が周溝等の確認調査を実施することとなり、この時に 3 本のトレンチを設定している。（第 37 図）この調査の結果、周溝については明確な溝の痕跡は確認されなかったが、1, 2 トレンチにおいては古墳を築造する時に行った版築層が確認され、現在残っている封土部分より南へ約 10m までは古墳の範囲として考えられる。

出土遺物（第 38 図）

姫塚古墳からは鉄鏃等が出土したという報告があるが、遺物が散在しその所在については不明となっている。ただ第 38 図の蛇行剣については姫塚古墳より出土したという伝えがあるので紹介する。

現存長 38.8cm、最大幅 2.6cm、最大厚 0.5cm を計る。身の部分のみが残っており、2ヶ所の山と谷をつくりゆるやかに湾曲している。断面は鍔が不明瞭であるがレンズ状をなすものと考えられる。先端部、及び基部が欠損している。北部九州では、福岡県浜山・千鳥遺跡第 20 号墳、船石遺跡 1 号墳など数例しか出土していない。

まとめ

姫塚古墳は、日田市内では数少ない竪穴式石室を主体部に持つ古墳であり、その石室から 5 世紀の築造と考えられる。

参考文献

賀川光夫 「大分県における 3 つの竪穴式石槨を有する古墳」 『西日本史学』 第 15 号 1953 年

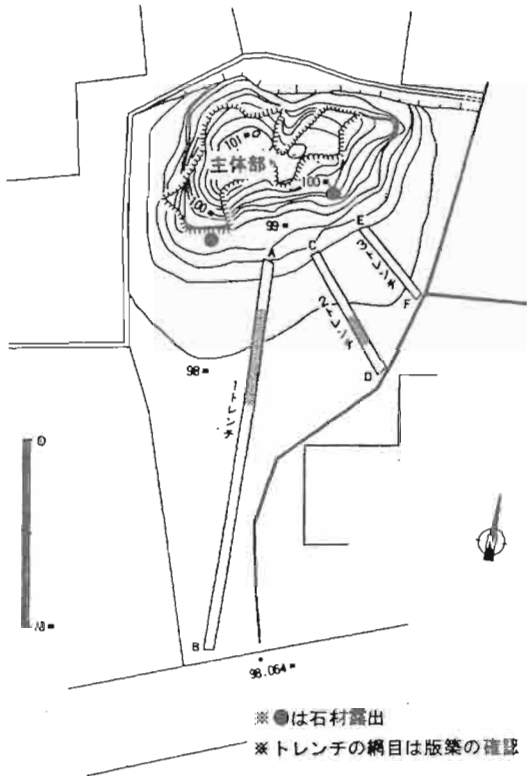
賀川光夫 「古墳文化」 『大分県の考古学』 1971 年

「姫塚古墳」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会 1988 年

「浜山・千鳥遺跡」『古賀町文化財調査報告書』第 5 集 古賀町教育委員会

「船石遺跡」『上峠村文化財調査報告書』上峠村教育委員会 1983 年

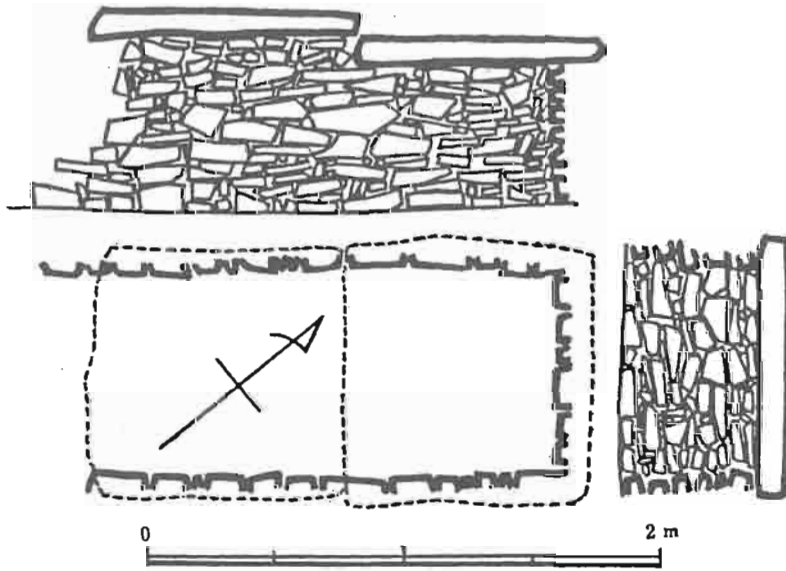
「北原古墳」『大字陀町文化財調査報告書』大字陀町役場 1986 年



第37図 姫塚古墳実測図(1/400)



第38図 姫塚古墳出土蛇行剣実測図



第39図 姫塚古墳石室実測図(1/30)



姫塚古墳近景



姫塚古墳近景

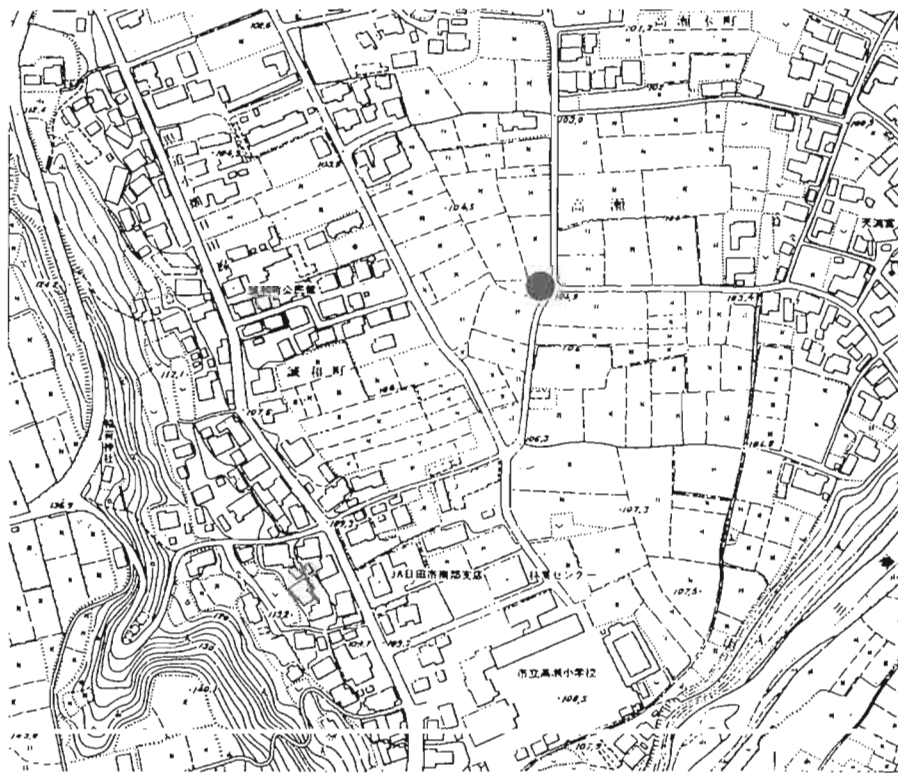
いひじあといたび
2. 永平寺跡板碑

位置 (第40図)

この板碑は、日田市大字高瀬字松葉に所在し、高瀬川左岸の河岸段丘上に立てられている。この一帯は高瀬川に沿って北に向かって扇状地の裾が広がっており、全体としては幾分の傾斜はあるものの概ね平坦な地形となっている。現在はこの地区には基盤目状の整然とした条里地割を見ることができるが、こうした地形を利用して古代から中世頃にかけては本格的な水田開発が始まったことが推定される。現在これらの水田は高瀬川の上流より水路を引き、そこから水を落としてまかなっているが、中世以前についてはどのようにして水路を引いていたか、その状況を知る手掛かりはこれまでの所わかっていない。また板碑は地元の話によれば、周辺の土地を開墾した時に発見されたものと現在の場所に移動したようである。

現状 (第41図, 第42図)

板碑は、正面を東の方向に向けて2基並んで立てられており、向かって左側を1号板碑、右側を2号板碑とする。



第40図 永平寺跡板碑位置図 (1/5,000)

1号板碑 (第41図)

安山岩系の堅い石材を用いて加工しており、首部は三角形を呈し、額との間に二条線を掘り込んでいる。幅は額の部分から塔身・基礎付近までほぼ均一に整えており幅約39cmを測る。基礎部分は加工を施さず、自然の状態を保ち、幅約45cmを測る。また全体の高さは、基礎から首部の天辺まで約98cmを測る。奥行は額の位置で約15cm、基礎の位置で約22cmを測る。文字は額の下に約35cmの大ききでキリークを刻み、その下には三行にわたって、

願主沙弥回 右為先孝先妣 應長元年八月日

の文字が彫り込まれている。この文からこの碑が応長元年(1311)に沙弥回という人物によって亡くなった母のために建てられたことが知られる。

2号板碑 (第42図)

1号と異なり凝灰岩の軟質な石材を用いて加工しているが、形態は1号とほぼ同じで首部は三角形を呈し、額との間に二条線を掘り込んでいる。幅は額の部分から基礎までは少しずつ裾広がりとなっており、額の部分は約86cm、基礎の部分で約108cmを測る。基礎は1号と同様に加工を施さず、自然面を残している。高さは中央付近で二つに折れているものの現状で約194cmを測る。奥行は全体にほぼ均等で約20cmを測るが、額の位置は少し長く約24cmを測る。梵字は額の下に約60cmの大ききでキリークを刻み、その下に文字を彫り込んでいる。文字はまず板碑の右端に「大願主 珠貫阿」という人物の名が見え、その左側上段に

光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨

と推定される計16文字の仏教用語が表現され、下段は九行にわたって

奉為 念阿聖 靈滅生 往生極 樂填證 菩提也 □乃聖 法界平 等利益

の計25文字の奉書文が表現されている。

これらの文に続けて左端には「正和二季 十月廿日」と彫られており、この供養塔が正和二年(1313)に珠貫阿という人物によって建てられたことが知られる。

まとめ

永平寺の起源は『日田郡司職次第』によると、保元2年(1157)に当時の郡司職であった大蔵永平が、婿の三牟田盛季に夜討ちにあつて暗殺され、その子の大蔵永俊がその霊を祀るために建立したとされている。板碑周辺には多くの五輪塔をはじめ、水田の中には永平寺と関連のある礎石と見られる石材もそのままの状態で見ることができる。これらは子孫の手によって代々守られてきたのであるが、天文17年(1548)に高瀬氏が高瀬合戦に敗れて以後廃寺になったと考えられている。

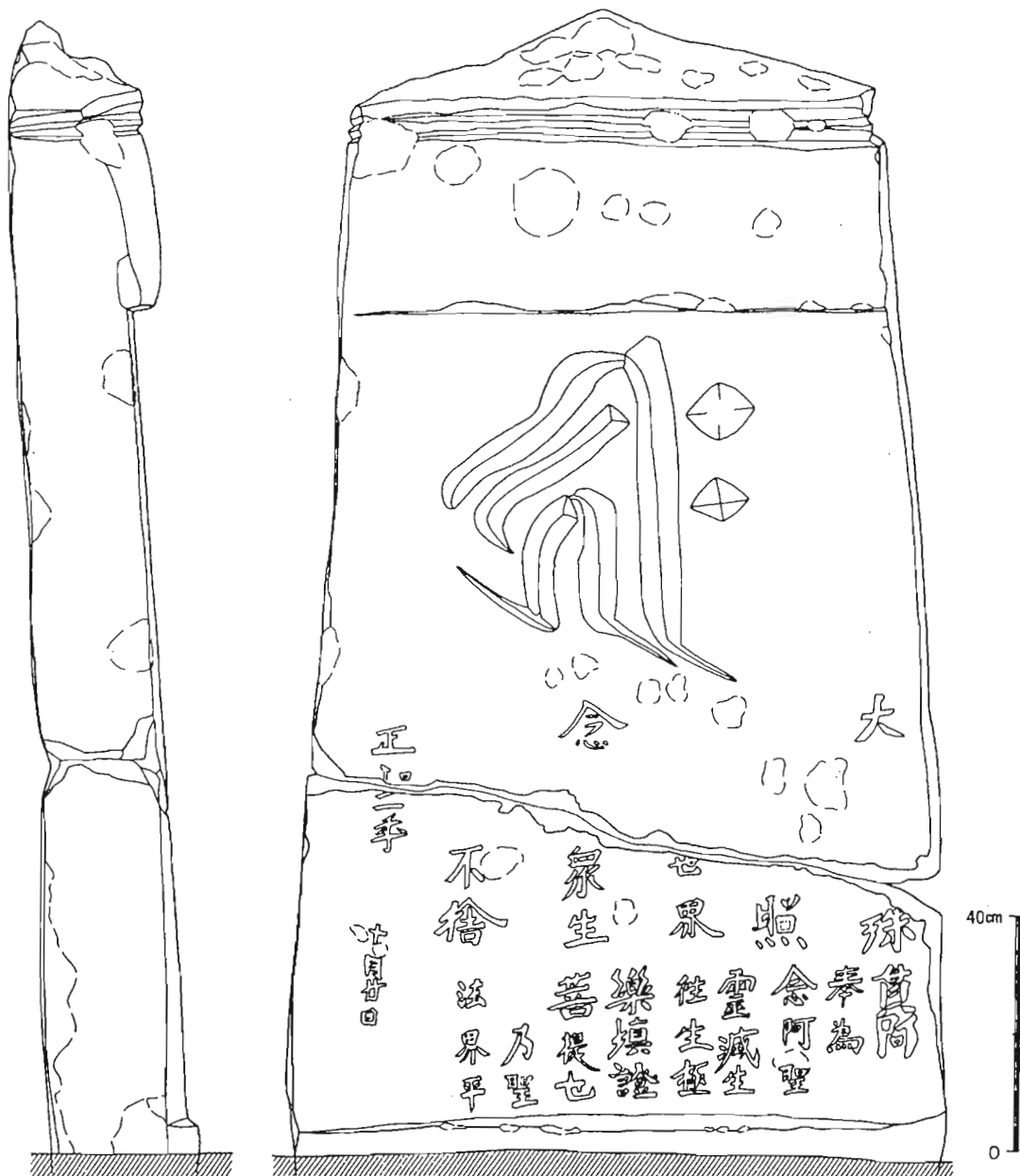
参考文献

『日田の文化財』 日田市教育委員会 1984

『日田金石年史』上巻 日田市教育委員会 1973



第41図 1号板碑実測図(1/6)



第42图 2号板碑实测图(1/12)



永平寺跡板碑遠景



永平寺跡板碑近景



1・2号板碑正面写真



1・2号板碑側面写真



1号板碑正面写真



2号板碑正面写真

3. 石人 せきじん

位置 (第43図)

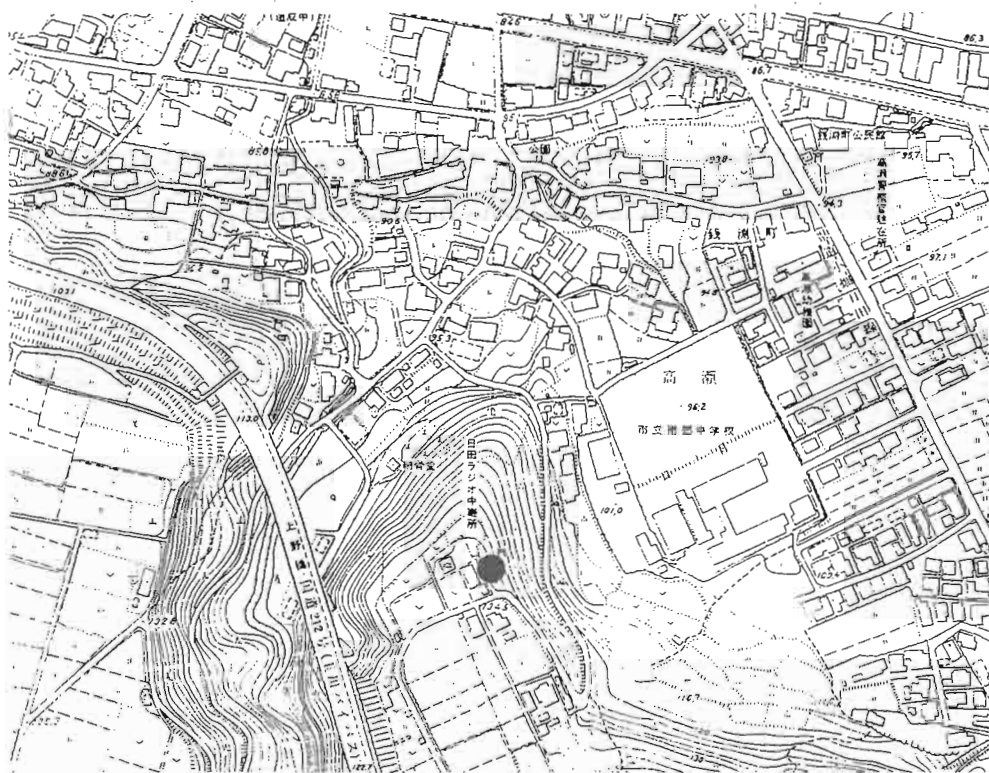
石人は日田市銭湊町 1997番地の陣ヶ原と呼ばれる台地に南端に安置されている。石人は2体存在し向かって左側が扁平石人、右側が甲冑を模した円体石人である。2体の石人は大分県指定有形文化財に指定され、お宮の東隣に覆い屋がかけられ保護されている。

現状 (図版14参照)

現在、扁平石人は4つの石で構成されており、上から一段目が顔から胴部かかる本体、次に脚部、さらに銘文の記された台座とこれらを支える自然石の台座からなる。先の天保年間に移されたとされる石人は一段目のもので、他の台座などは後補である。

石人は扁平な奴舩形をなし、高さ47cm、幅68cm、厚さ15cm前後で阿蘇溶結凝灰岩を使用している。正面には人物の顔が印刻されていて、径約19cmの円の輪郭の中に目と口が掘りこまれている。

また、裏面には靴を表現した高さ13cmの矢が2cm間隔に6本みられ、全体に赤色顔料が



第43図 石人位置図(1/5,000)

塗布されている。両面ともに風化による剥落が著しい。

歴史的経過

この石人は、扁平石人の台座にその由来が江戸時代の儒学者広瀬淡窓の撰、広瀬健の書によって記されている。それを簡単に要約すると江戸時代の安政年間（1854～1860年）に久留米藩主である有馬侯が、古代の豪族筑紫君磐井の墓に祀られていたと思われる石人1体を発見した。この石人を後に豊前の僧雲華院大舎に贈り、土台に大舎は日田の隈に住む山田元輔にこれを鏡坂に安置したとある。それが戦後になって現在の場所に移された。

以下銘文を示す。

扁平石人の台座に記されている銘文は次のとおりである。

(安政丙辰銘文)

石人磐井故物半隠	山田翁得之僧雲華	建鏡阪側	百夫與致此高原道是
磐侯故物存烟樹新隣	行幸路雲華曾入座禪	門滄桑幾變人無恙寵	辱多端石不言非為詩
翁能好古千年誰掃	苔痕	安政丙辰 廣瀬健	範書

次に台座の左から記されている銘文は次のとおりである。

(嘉永七年銘文)

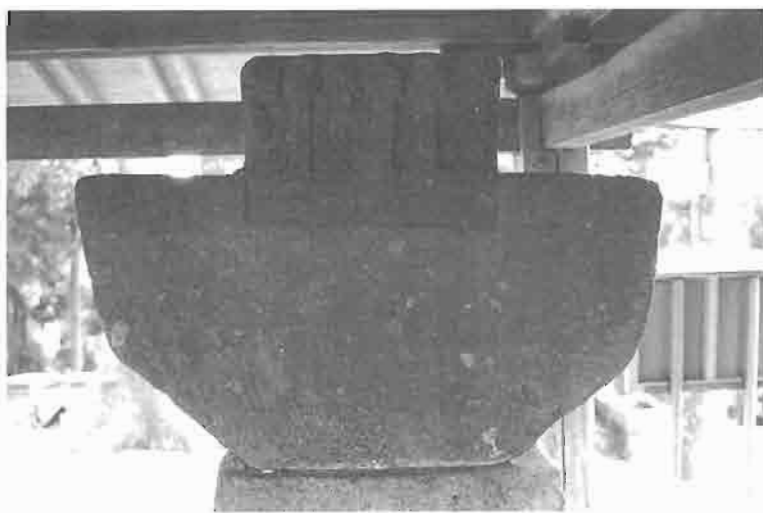
石人銘	筑後上妻縣南二里有	石人数十慶長中田中	氏采以築城無復遺者
天保中米府大夫有馬	氏好古偏搜南山於榛	莽中獲一後貽豊前僧	大舎大舎携入京師觀
者莫不奇重既而又貽	我縣山田元輔元輔弟	可祐導余及僧五岳往	觀長一尺五寸有奇重
一百六斤方顛短軀背	負六箭如武夫急裝而	座者狀形貌怪異刻彫	粗拙其為古物無疑按
筑後風土記石人筑紫	豪族磐井氏所造蓋當	繼體天皇時距今一千	三百餘年矣完物之存
莫古於此夫古昔稱豪	族者何限 湮滅無聞	獨筑人知有磐井氏以	石人存也則又莫珍於
此山田氏我縣豪右兄	弟嗜古書画陶冶雜然	滿室而今後保千年者	其能幾哉最奇重之有
以也可祐造石片木請余	銘之銘曰	南山崔々誰使 獨淮	水湯々我將 浴神如有
形乃不足善哉古	人愛此素朴	嘉永七年歲次甲寅冬	十二月廣瀬範撰



石人2体正面写真



扁平石人上部
正面写真



扁平石人上部
裏面写真

4. 石幢 せきどう

位置 (第44図)

この塔は、現在三隈川南岸の河岸段丘上にあり、鏡坂公園へ上る道路の脇にひっそりと立っている。石幢は一般に六面石幢とか六地藏塔と呼ばれ、笠の下の龕の各面に一躰ずつ、合計六躰の仏像を区画して彫出する「仏龕式」という様式に区別され、普通中台の下に六角竿柱を設けている。

『日田金石年史』によれば、もとは鏡坂にあったとされ、それが昭和 年頃に現在の地に移築したようである。この鏡坂近辺には古寺などがあったことは記録や伝えにもないが、中世にはこの見晴らしのよい高台に寺が建てられ、その一角にこの供養塔が立てられたことが推測される。それが近世・現代に至り寺が失われてもこの石幢だけは地元の人々に守られ続け、現在に至ったものであろう。



第44図 石幢位置図(1/5,000)

現状 (第 45 図)

この塔は凝灰岩の軟質な石材を使い、宝珠は欠損しているものの、笠・龕・中台・幢身・台座は全体的によく残存している。笠・龕・中台・幢身・台座ともに六面を呈しているが、方向は移築した時に一度切り離して据え直したためずれている。また笠と龕、中台と幢身、幢身と台座の間にはこの時の補修の痕跡が残っている。現状の大きさは、台座から笠頂部まで高さ約 148cm を測る。

各部位についてみて見ると、まず笠については幅約 56cm を測り、頂部は一部欠損している。彫刻は細かく、6 面を区切る方向には稜線を際立たせている。

次に龕は六面にわたって幅約 12cm、高さ約 20cm を測る長方形の彫り込みの中に、六躰の地藏を彫出している。地藏のそれぞれの手には異なる道具が彫られ、また地藏の服などには白色を使った彩色が施されている。

中台の幅は一部欠損しているが最大で約 65cm を測り、やはり六面に稜をつけて面取りしている。台座の上面は平坦であり、側面には蓮弁を陽刻している。

次に幢身についてであるが、やはり幅約 18cm、高さ約 72cm の面取り部分を六面に設け、そのうちの一面のみに文字を陰刻している。文字は三行にわたって、

奉造立六道能化主六地藏菩薩□相當為□□禪尼追膳

是長祿第 季應鐘念 日大施主沙門恒傳叟

毎日早朝入諸定入諸地獄令離苦無佛世界度衆生今世後世能□□

と書かれており、その内容から、沙門恒傳叟という人物が長祿四年（1460）十月二十四日に亡き禪尼を追膳供養するために立てられたことがわかる。

まとめ

石幢は大分県内を見ると、その中心は大野川流域の南部に多く残っており、いずれも高さ 2 m 以上で笠がしっかりしたものが目立つ。また九重町野上に残る滝上石幢は、造立年代が長祿二年(1458)で高さも宝珠まで含め 171cm と高さも小さくこの石幢と比較しよく似ている。

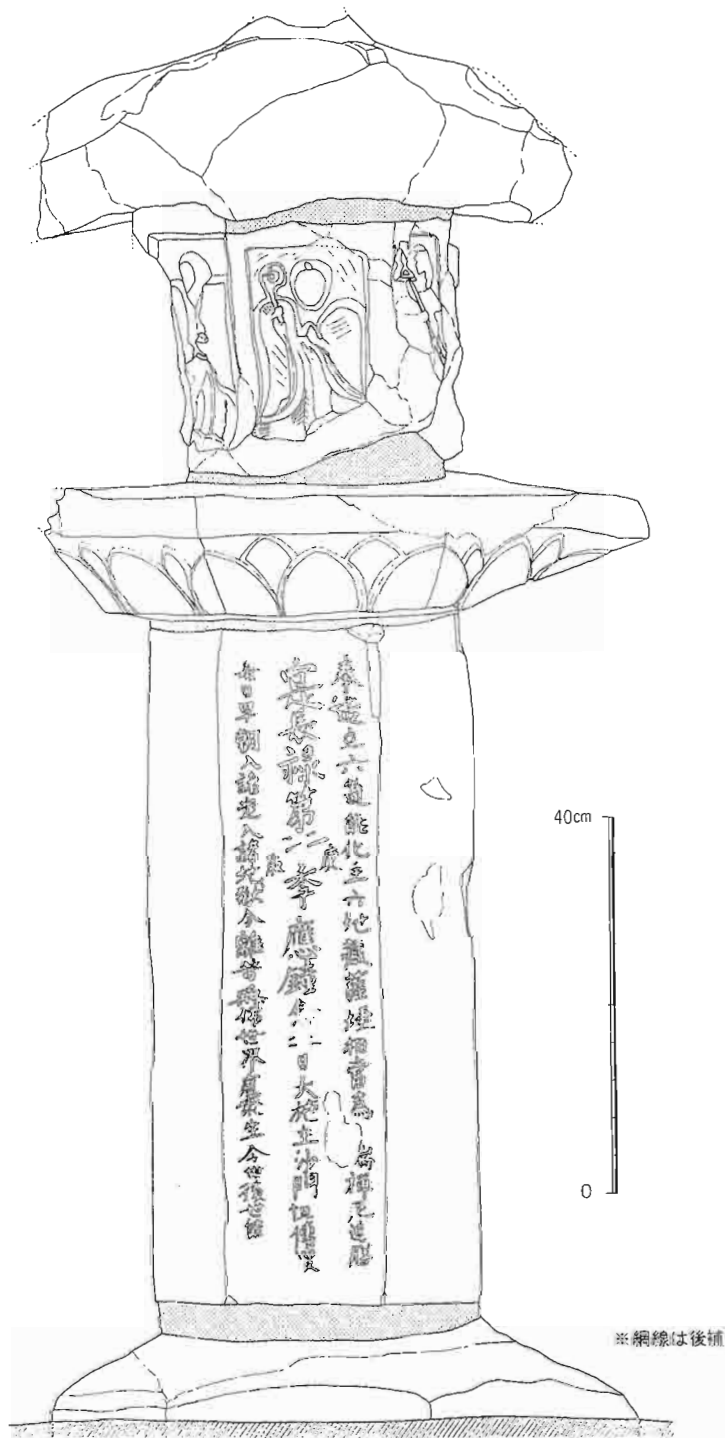
日田市内について見てみると、他に豆田町広瀬家にある永正 2 年(1505)のものがあるだけである。この像もやはり「仏龕式」で六面に地藏像を彫出している。また幢身の一面に「永正二年拾月廿二日 妙依 道永 道善 施主」と陰刻されており、施主三人の名と造立の年号を知ることができる。

参考文献

『日田の文化財』 日田市教育委員会 1984

『日田金石年史』上巻 日田市教育委員会 1973

『大分県の文化財』 大分県教育委員会 1991



第45図 石幢実測図(1/8)



石幢近景(南方向より)



石幢正面

忽 田 遺 跡
日田市埋蔵文化財調査報告書
第8集

発行日 平成6年3月31日
編 集 日田市教育委員会
発 行 〒877
大分県日田市田島2-6-1
印 刷 山本印刷有限会社

